高岡市埋蔵文化財調査概報第３冊

石塚遺跡調査概報Ⅰ

―都市計画道路-下伏間江・福田線築造に伴う昭和61年度の調査―

1987年３月

高岡市教育委員会

序

高岡市街地の南西郊は，県西部の大河川庄川の形成した扇状地の末端部分に当たります。扇端部の微細な変化に富んだ地形と湧水地帯という環境を活かして，初期農耕文化成立以前より今日に至るまで，人々の生活の舞台となってまいりました。その証を数々の遺跡の存在に見ることができます。

これらの遺跡の一つがここに報告する石塚遺跡です。このたび，都市計画道路―下伏間江・福田線が当遺跡内を通ることになり，昭和60年度の試掘調査に引き続いて，今回その一部の本調査を行いました。

石塚遺跡は，弥生時代中期を中心とする拠点的大集落として知られており，過去数次にわたる調査が行われてまいりました。今回の調査でも，今まで同様弥生時代の遺構が発見され，遺物の出土を見ましたことは，この大集落解明へ一歩前進したことを示します。また，鎌倉・室町時代の井戸址等が発見されましたことは，当市域におけるこの時代の生活を探る上で，貴重な資料を提供したと言えます。

今回の調査においても，多くの方々より御指導・御援助を賜わりました。御協力いただいた地元の皆様，関係各位に厚くお礼申し上げます。

本書が，高岡市域の歴史の解明に少しでも寄与することができ文化財保護の一助になれば幸甚です。

昭和62年３月31日

高岡市教育委員会
教育長　竹　下　外　男

例　　言

1．本書は、高岡市建設部道路課による都市計画道路―下伏間江・福田線築造に伴う，石塚遺跡の調査の概要報告書である。

2．本調査は，高岡市建設部道路課の委託を受けて，高岡市教育委員会が実施した。

3．調査地区は，富山県高岡市和田1,205 に所在する。調査期間は，昭和61年８月４日から11月28日までである。

4．本調査は，富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事宮田進一氏の指導を受け，高岡市教育委員会社会教育課文化係主事大野文郷，同文化財保護主事山口辰一が担当した。また，金沢美術工芸大学助教授小島俊章氏，富山考古学会会員西井龍儀氏の指導・助言，富山県埋蔵文化財センター主任岸本雅敏氏，同文化財保護主事山本正敏氏・狩野睦氏・池野正男氏・久々忠義氏・岡本淳一郎氏の援助・協力を得た。

5．事務局は，高岡市教育委員会社会教育課に置き，課員の協力を得て，文化係長太田健一が調査事務を担当し，社会教育課長熊木史郎が総括をした。

6．図面の方位は真北（座標北）で，遺構は下記の記号を使って表わした。

　　ＳＤ―溝，ＳＥ―井戸，ＳＫ―土坑

7．現地調査及び報告書作成に当たって，以下に記す各氏，各機関から御教示いただいた。（敬称略・五十音順）

　　秋山進午，穴沢義功，荒井健治，小島芳孝，千秋謙治，塚原二郎，舟崎久雄，古岡英明，丸山竜平，武笠多恵子，森田友子

　　富山県埋蔵文化財センター，富山大学人文学部考古学研究室

8．本書の執筆は，山口が担当した。

目　　次

序
例言
目次

Ⅰ　遺跡概観……1
Ⅱ　調査経過……4
Ⅲ　調査概況……8
Ⅳ　弥生時代……9
　1．概況……9
　2．土坑……9
　3．溝……12
Ⅴ　中　　世……23
　1．概況……23
　2．井戸址……23
　3．土坑……29
　4．溝……30
Ⅵ　結　　語……35

挿　表　目　次

第1表　弥生土器観察表〔1〕……14
第2表　弥生土器観察表〔2〕……15
第3表　弥生土器観察表〔3〕……16
第4表　中世土器・陶器観察表……31

図　版　目　次

図版１　遺構　１．遺跡全景（東）
　　２．遺跡全景（北）
図版２　遺構　１．調査地区遠景（東）
　　２．調査地区遠景（南）
図版３　遺構　１．調査地区近景（東）
　　２．調査地区近景（西）
図版４　遺構　１．ＳＫ05全景（北）
　　２．ＳＫ09全景（北）
図版５　遺構　１．ＳＫ10全景（北）
　　２．ＳＫ18～20全景（南）
図版６　遺構　１．ＳＫ13～20全景（東）
　　２．ＳＫ13～20全景（北）
図版７　遺構　１．ＳＫ20土器出土状態（南東）
　　２．ＳＫ20土器出土状態（南）
図版８　遺構　１．ＳＤ01北側近景（南）
　　２．ＳＤ01南側近景（南）
図版９　遺構　１．ＳＤ01自然樹木出土状態（北）
　　２．ＳＤ01自然樹木出土状態（東）
図版10　遺構　１．ＳＥ01～03全景（西）
　　２．ＳＥ01～03全景（北）
図版11　遺構　１．ＳＥ01・02全景（南）
　　２．ＳＥ01・03全景（北西）
図版12　遺構　１．ＳＥ01全景（北）
　　２．ＳＥ01全景（北）
図版13　遺構　１．ＳＥ02全景（北）
　　２．ＳＥ02全景（南）
図版14　遺構　１．ＳＥ03全景（北）
　　２．ＳＥ03全景（西）
図版15　遺構　１．ＳＥ03全景（西）
　　２．ＳＥ03全景（北）
図版16　遺構　１．ＳＥ04全景（北）
　　２．ＳＥ04全景（北）
図版17　遺構　１．ＳＥ04近景（南）
　　２．ＳＥ04近景（北）
図版18　遺構　１．ＳＥ04東壁（西）
　　２．ＳＥ04西壁（東）
図版19　遺物　弥生土器
図版20　遺物　弥生土器
図版21　遺物　土製紡錘車，中世土器・陶器
図版22　遺物　木製品

挿　図　目　次

第１図　遺跡地図（1/2万5千）……2
第２図　調査地区位置図（1/5,000）……3
第３図　調査地区全体図（1/400）……5
第４図　遺構図〔１〕（1/200）……6
第５図　遺構図〔２〕（1/200）……7
第６図　土坑実測図（1/80）……11
第７図　ＳＤ01断面図（1/80）……13
第８図　弥生土器実測図〔１〕（1/3）……17
第９図　弥生土器実測図〔２〕（1/3）……18
第10図　弥生土器実測図〔３〕（1/3）……19
第11図　弥生土器実測図〔４〕（1/3）……20
第12図　弥生土器実測図〔５〕（1/3）……21
第13図　弥生土器実測図〔６〕（1/3）……22
第14図　土製紡錘車実測図（1/2）……22
第15図　ＳＥ01～03実測図（1/30）……24
第16図　曲物実測図〔１〕（1/8）……26
第17図　曲物実測図〔２〕（1/8）……27
第18図　ＳＥ04実測図（1/30）……28
第19図　木製皿実測図（1/2）……29
第20図　中世土器実測図（1/3）……32
第21図　中世陶器実測図〔１〕（1/3）……32
第22図　中世陶器実測図〔２〕（1/3）……33
第23図　中世陶器実測図〔３〕（1/3）……34

Ⅰ　遺跡概観

遺跡の位置

石塚遺跡は，国鉄高岡駅の西南西約3.0km，西高岡駅の北東約1.8kmの地点に位置する。遺跡推定範囲の東端部をこれらの駅を結ぶ北陸本線が走っている。

飛騨山中，岐阜県荘川村に源を発した庄川は，大小の渓流を合わせつつ，五箇山の山地を曲流し，東砺波郡庄川町金屋にて山地と別かれる。そして大扇状地を形成して，富山湾へ注いでいる。現在の庄川は扇状地の東辺に位置し，高岡市域の東部を北流している。往古の庄川は，扇状地上を奔流し，氾濫をくり返しつつ数状の河川に分かれて，小矢部川（旧射水川）へ合流していたとされる。その名残りが当遺跡の東約2.0kmを北流し高岡市街地へ向かう千保川で，この川は17世紀末まで，庄川の本流であった。また当遺跡の東側を流れる和田川や西側を流れる祖父川は，庄川扇状地の湧水を水源とする河川である。

当遺跡一帯は，庄川扇状地の末端部に当たり標高10～15ｍを計る。扇端部の一般例にもれず，湧水地帯でもある。現在は平坦な水田地帯であり，旧地形を伺い知ることはできないが，扇端部の湧水地帯という環境を活かしつつ，諸搬の活動がなされてきたことと思われる。

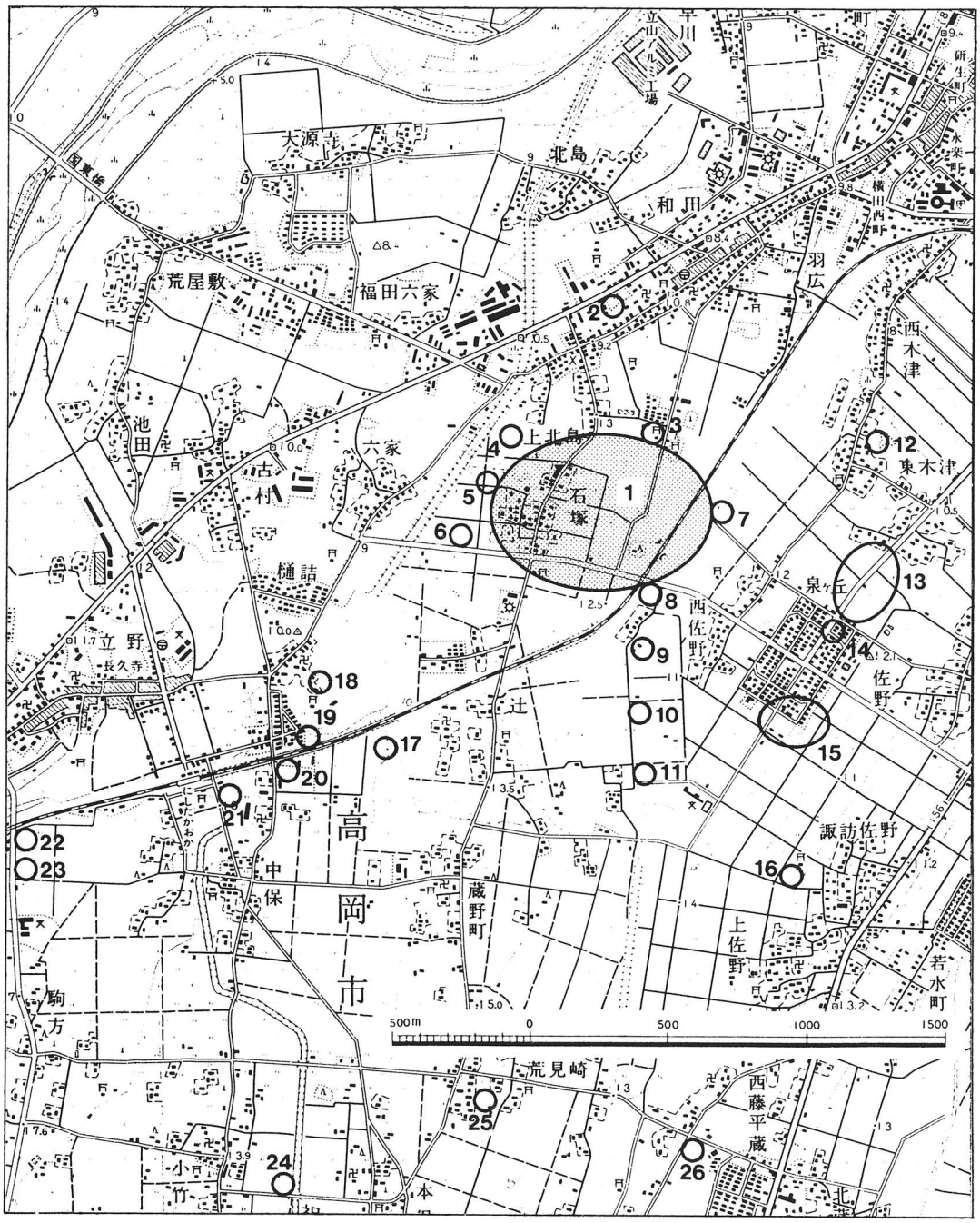
旧福田村・佐野村・東五位村にまたがる，石塚・寺野・石名瀬・西佐野・中保・荒見崎等の地区は，弥生時代の遺跡地帯として知られているところであるが，弥生時代に先立つ縄文時代晩期の遺跡の所在も確認されている。当遺跡の西側に接して，石塚江之戸・五俵田・蜻保等の遺跡，南西側に石塚屋敷田遺跡（当遺跡南東隅部）が位置している。さらに１kmぐらい視野を拡げると，北側に下北島住吉遺跡，南東側に泉ヶ丘遺跡，南西側に辻，中保Ａ遺跡等が位置している。縄文時代晩期に平野部への進出が図られ，弥生時代と同様な所に遺跡が立地しているのである。

石塚遺跡より前期の弥生土器の出土が確認されていることは，縄文時代晩期より引き続いて弥生時代の遺跡が営まれたことを示唆している。中期に至れば，当遺跡以外にも，南側至近に和田寺野遺跡，南約2.0kmに荒見崎村内遺跡，南西約1.5kmに中保Ａ遺跡の存在が知られている。後期の遺跡としては，下佐野遺跡が著名である。

古墳時代から奈良・平安時代にかけては，当遺跡の東側に展開する，石名瀬Ａ・Ｂ，西木津，東木津遺跡等が存在している。東木津遺跡では奈良時代の須恵器が出土している他，先述の弥生時代の遺跡からも，土師器・須恵器の出土を見ている。

既往の調査

現在石塚遺跡と称されている一帯より，弥生土器をはじめ種々の遺物が出土することは早くから知られていた。昭和42年，当地に農地改善事業が行われ，その折も遺物が出土した。これを受けて，昭和43年，高岡工芸高校地歴クラブＯＢ会により，本格的発掘調査が行われた。第２図でＧとして示した地点である。この調査では，径14ｍの環状遺構と10個のピット状遺構が検出され



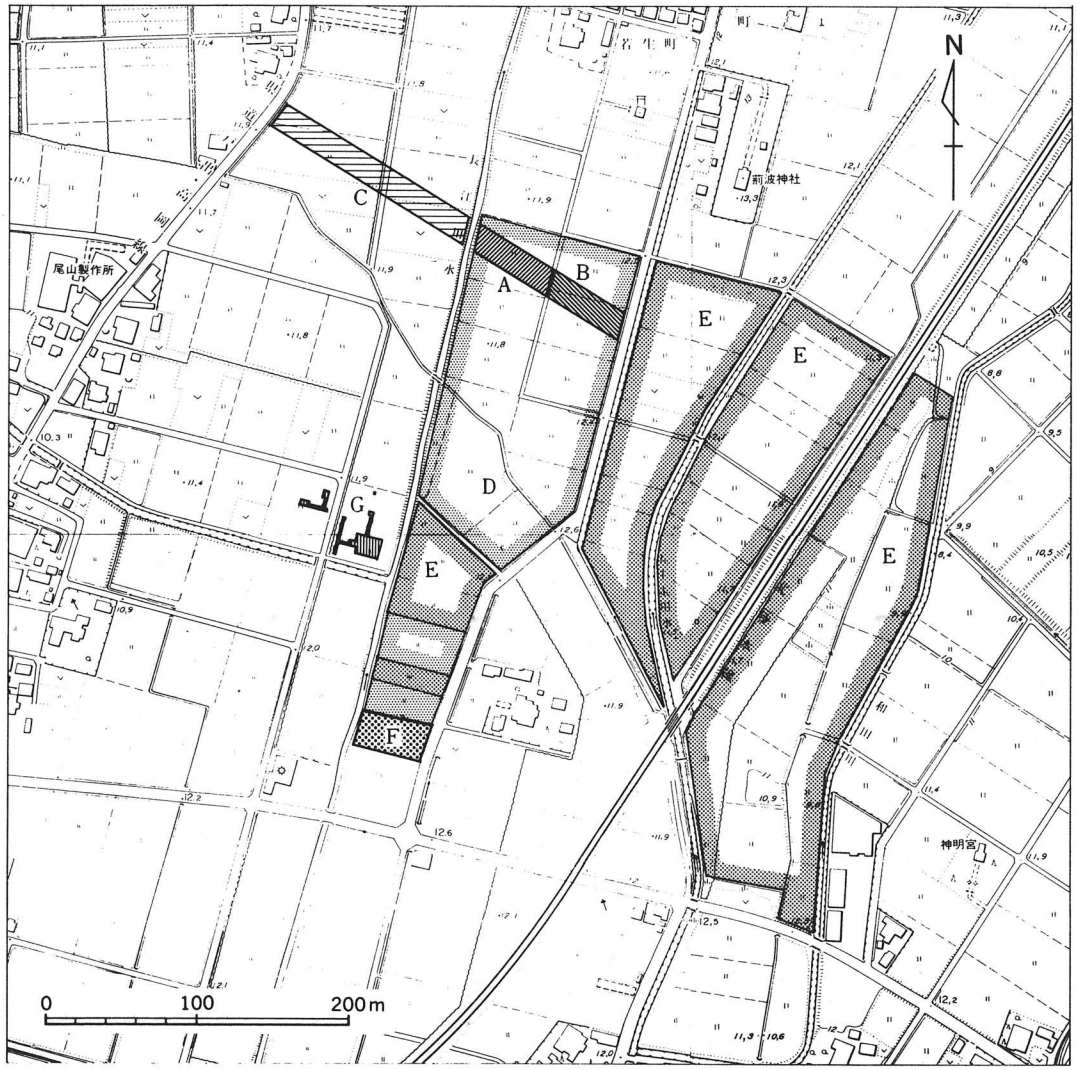
第1図　遺跡地図（1/2万5千）

1．石塚遺跡，2．下北島住吉遺跡，3．北島遺跡，4．石塚江之戸遺跡，5．石塚五俵田遺跡，6．石塚蜻保遺跡，7．石名瀬B遺跡，8．石名瀬C遺跡，9．和田寺野遺跡，10．石名瀬A遺跡，11．西佐野千代遺跡，12．西木津遺跡，13．東木津遺跡，14．泉ヶ丘遺跡，15．下佐野遺跡，16．諏訪（上佐野）遺跡，17．辻遺跡，18．樋詰遺跡，19．中保C遺跡，20．中保A遺跡，21．中保B遺跡，22．立野地頭田遺跡，23．千鳥ヶ丘遺跡，24．小竹遺跡，25．荒見崎村内遺跡，26．西藤平蔵遺跡

た。ピット状遺構は弥生時代のもので，1.5m余りの長方形・円形・不定形などのものや，くるみ貯蔵用のものである。本調査以前にも同様なものが数個確認されている。弥生土器の大半はこれらピット状遺構からの出土であり，その後，県下の弥生時代中期を代表するものとして呈示されるようになった。(和田1959，上坂・上野1968，上野1972)。

このG地点より南約 120mの所で宅地造成が行われることになり，昭和55年の試掘調査に続いて，昭和56年に本調査を高岡市教育委員会が実施した。第2図のFである。(逸見1982)。

昭和56年及び57年には，県営ほ場整備事業に先立つ試掘調査が高岡市教育委員会により行われた。これは遺跡推定範囲の西側一帯を広範囲に実施したものである。第2図においては，昭和56年度対象地をD，昭和57年度対象地をEで示した。(逸見1982・1983)。



第2図　調査地区位置図(1/5,000)

Ⅱ　調査経過

調査に至る経緯

都市計画道路，下伏間江・福田線は，高岡問屋センターの南側，下伏間江地内より，福田地内の国道８号線へ至る幅員18ｍの道路である。国鉄高岡駅の南約1.5㎞付近を東西に走り，北陸本線を跨ぎ，石塚遺跡の北側を走るものである。しかるに昭和59年度の工事中に土器の出土が確認されるに至り，石塚遺跡の範囲がこの道路予定地部分にまで達することが想定された。よって，市都市計画課，市教育委員会及び富山県埋蔵文化財センターとの協議が行われ，試掘調査を実施することになった。

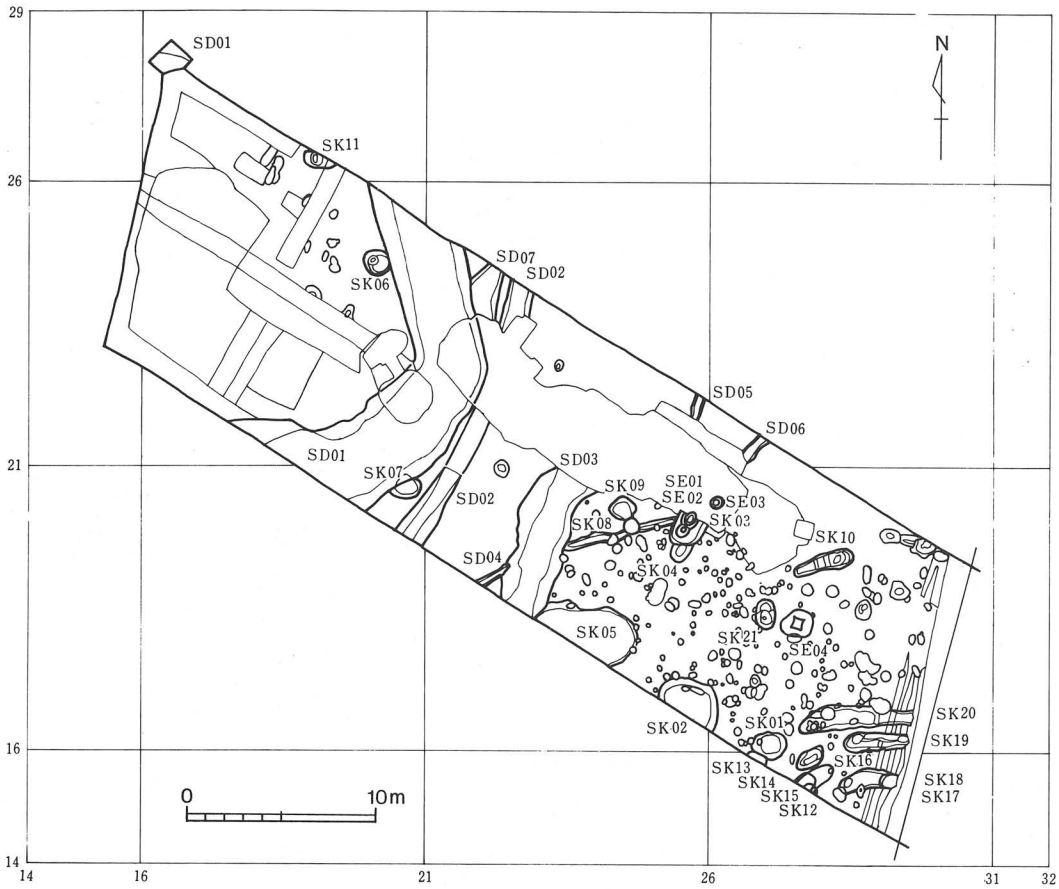
試掘調査対象地は，当面の道路築造予定地である。北陸本線の西側を走る市道より，主要地方道・高岡環状線まで約270ｍ，面積約4,860㎡である。試掘調査は昭和60年度に実施され，その成果はすでに報じた通りである(大野1986)。対象地のほぼ中央に長江用水が流れ，ここを境に，東側を前期調査地区（第２図のＡ・Ｂ）とし西側を後期調査地区（Ｃ）と区分して実施した。その結果，前期調査地区は遺構・遺物が豊富であるのに対し，後期調査地区は遺物が散出する程度の内容であった。このことより，前期調査地区を本調査するに至った。

発掘調査の経過

調査開始　調査対象地は，市道より長江用水までの間110ｍであるが，実質的には長さ約100ｍ，幅約15ｍの1,500㎡の範囲である。中央に用水が走っていることと排土の都合もあり，西側を前期調査地区（第２図のＡ）として先に調査を行ない，その後東側（Ｂ）の調査を行うことにした。ただし，バックフォーによる表土除去は，場外へ搬出することとして両地区同時に実施することにした。そして８月４日より開始した。

遺構の検出　前期調査地区の西部南側と中央部北側には大きな攪乱（以下，大攪乱と称する）が存在した。これは昭和41年～43年の農地改善事業に伴うもので，特に中央部北側の大攪乱にはコンクリートブロックが多量に埋めてあった。バックフォーにより相当量搬出したが，２次的に移動した基盤層がコンクリートブロックの上部を覆っており，攪乱かどうかの判断が難しかったので，不十分なものとなった。残りは人力による搬出となり，９月中旬ぐらいまで続いた。８月中旬の盂蘭盆の休業や攪乱掘りのため，遺構が確認され出したのは９月中旬以降となった。９月下旬は，弥生時代の大溝ＳＤ01の掘り下げを中心に作業を進めた他，中世の曲物積上げ井戸を３基検出した。

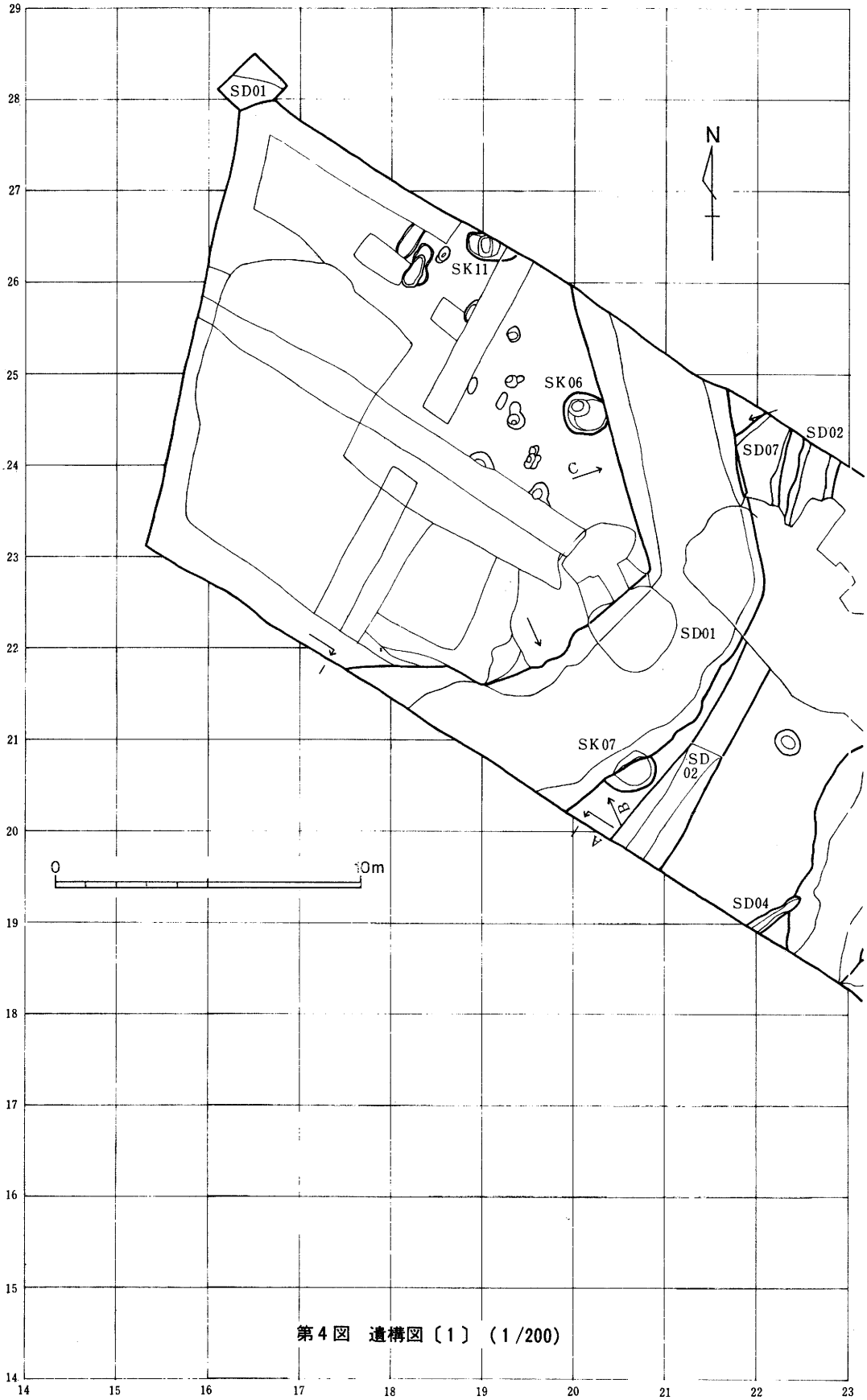
調査の展開　10月中は遺構の掘り下げを中心とした作業を行った。この段階では遺構は大別して弥生時代と中世の２つの時期に所属することがはっきりしてきた。中世の井戸址がさらに一基確認された。これは縦板組み隅柱横桟どめ井戸である。試掘調査結果では，西側の前期調査地区の方が遺構が少なく，東側の後期調査地区の方が多く時間もかかると予想されるものであった。



第3図　調査地区全体図（1/400）

しかし、前期調査地区において予想を上回る遺構が見られ，また多大の攪乱に手こずり，調査の遅れは明確となり，降雪期以前に調査を終了させることが困難となった。県埋蔵文化財センターの指導もあり，関係機関との協議のすえ，今年度は前期調査地区のみ終了させ，後期調査地区は次年度に調査を実施することに決定した。

調査の終了　10月末より11月上旬にかけては，岸本雅敏氏をはじめ県埋蔵文化財センター職員の援助を得て，図面作成を行った。また，遺構・遺物について種々の御指導を受けた。11月中・下旬は，写真撮影や中世遺構のため残った弥生時代の遺構の掘り下げを行った。また，井戸址の木組みや曲物の取り出しは手数のかかるものであった。ようやく11月28日に現地調査を終えることができた。



第４図　遺構図〔１〕（１/200）

第5図　遺構図〔2〕（1/200）

Ⅲ　調査概況

調査地区

石塚遺跡の現況は水田部分がほとんどを占める。かっては，扇状地の末端として起伏に富んだ地形で，遺跡立地の微細の条件を確認されたが，農地改善事業やほ場整備事業が行われ，平坦な地形となっている。周囲には視界を遮ぎるものがなく，北方から西方にかけては，二上山とそれに続く西山丘陵が指呼の間にあり，東方には立山連峰の姿が臨める。

先述のごとく調査対象地が予定の半分に減ったので，調査面積は730m²となった。土層は単純なものであった。基本層序は，20～50cmの耕作土の下は，直接淡黄白色粘質土の地山に達するものであるが，この間わずかではあるが中世の包含層が存在する部分があった。

グリッドの設定

石塚遺跡の範囲については，以前，東西350m，南北300mぐらいと考えられていたが，最近では東西800m，南北700mぐらいと指摘されるに至っている。いずれにしろ広範囲であるので，将来行われる調査との統一を持たせることを考慮してグリッドを設定した。グリッドの割り付けの基準として，平面直角座標系の第７座標系（原点は北緯36°00′00″・東経137°10′00″）を利用した。１辺３m四方を一つの区画となし，東西をＸ軸，南北をＹ軸とした。そして，南西隅の数値がそのグリッドを表わすものとした。Ｘ＝１，Ｙ＝１の地点は，原点より西へ16,180，北へ81,120m向った位置である。以上のことより，Ｙ軸及び方位は第７座標系の方眼北を指している。

遺構

検出された遺構は以下の通りである。

井戸址４基，ＳＥ01～04；　中世；ＳＥ01～04

土坑21基，ＳＫ01～21；　弥生時代；ＳＫ02･05～07･09～20，　中世；ＳＫ01･03･04･08･21

溝７条，ＳＤ01～07；　弥生時代；ＳＤ01･02･07，中世；ＳＤ03～06

この他にピットが多数検出されたが，規則的配列を示さず，建物址と認定することはできなかった。遺構の時期は，弥生時代と中世との２時期であり，出土遺物も同様である。このため，以下の記述に当たっては，この２時期に先づ分けて行うことにした。

Ⅳ　弥生時代

1．概　　況

弥生時代の遺構は以下のものが検出された。

土坑17基，ＳＫ02・05～07・09～20

溝３条，ＳＤ01・02・07

弥生時代の遺構は，調査地区全域に分布している。個別的に見ると，土坑が南東側を中心にしているのに対し，溝は西側に位置している。ピットが多数検出されたが，そのほとんどは中世のものである。調査地区中央の中世の溝ＳＤ03より西側で検出されたピットは，すべて弥生時代のものである。ＳＤ03より東側においては弥生時代のピットは少ない。

これらの遺構の埋土・覆土は，灰色を基調とするものである。これに対して中世の遺構の場合は，黒灰色を基調としやや褐色がかったものであり，両者の違いは極めて明瞭であった。出土遺物がない場合や少量であっても，この土層の違いにより時期を判断した。

出土遺物は，弥生土器がほとんどを占める。これ以外に，弥生土器片を再利用した紡錘車８点，フレイク少量，自然樹木が出土している。弥生土器は中期のものである。この段階において石器類の少ない点が注目される。

2．土　　坑

ＳＫ02

調査地区の南東部（25・26，16・17）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸3.56ｍ，短軸1.94ｍ以上，深さ27cmを計る。南側は調査地区外となる。中世のピットに数箇所切られている。出土遺物は，弥生土器と弥生土器片再利用の紡錘車（第14図―No.201）である。弥生土器No.103（第８図）は，中世の土坑ＳＫ03出土土器と接合している。No.201は形が整っていないが，２次的に破損したためである。復元すると径4.6cmを計る。また，厚さ0.6cm，孔径0.4～0.8cmを計る。

ＳＫ05

調査地区の南東部（22～24，17・18）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸5.44ｍ以上，短軸2.94ｍ以上，深さ47cmを計る。南側は調査地区外となり，西側は中世の溝ＳＤ03に切られている。また，中世のピットに数箇所切られている。出土遺物は弥生土器である。大型の土坑でもあり多くの土器が出土した。

ＳＫ06

調査地区の北西部（19・20，24）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.58ｍ，短軸1.38ｍ，深さ53cmを計る。ＳＤ01に切られている。出土遺物は弥生土器である。弥生土器No.114(第10図）は，ＳＫ17出土土器と接合している。

ＳＫ07

調査地区の南西部（20，20）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.75ｍ，短軸1.23ｍ以上，深さ64cmを計る。ＳＤ01に切られている。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ09

調査地区の中央部（24，20）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.46ｍ，短軸1.18ｍ，深さ33cmを計る。中世の土坑ＳＫ08に切られている。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ10

調査地区の北東部（27・28，19）区で検出された。平面形は長楕円形を呈し，長軸3.38ｍ，短軸82cm，深さ43cmを計る。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ11

調査地区の北西部（18・19，26）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.72ｍ，短軸82cm，深さ34cmを計る。北側は調査地区外である。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ12

調査地区の南東隅部（27・15）区で検出された。北東～南西に長い楕円形の平面形になると想定される。規模は，長軸43cm以上，短軸43cm，深さ19cmを計る。ＳＫ15・16と重複しており，これらを切っている。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ13

調査地区の南東隅部（26・27，15・16）区で検出された。北東～南西に長い楕円形の平面形になると想定される。規模は，長軸36cm以上，短軸1.20ｍ，深さ33cmを計る。北側は中世の土坑ＳＫ01に切られ，南側は調査地区外となる。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ14

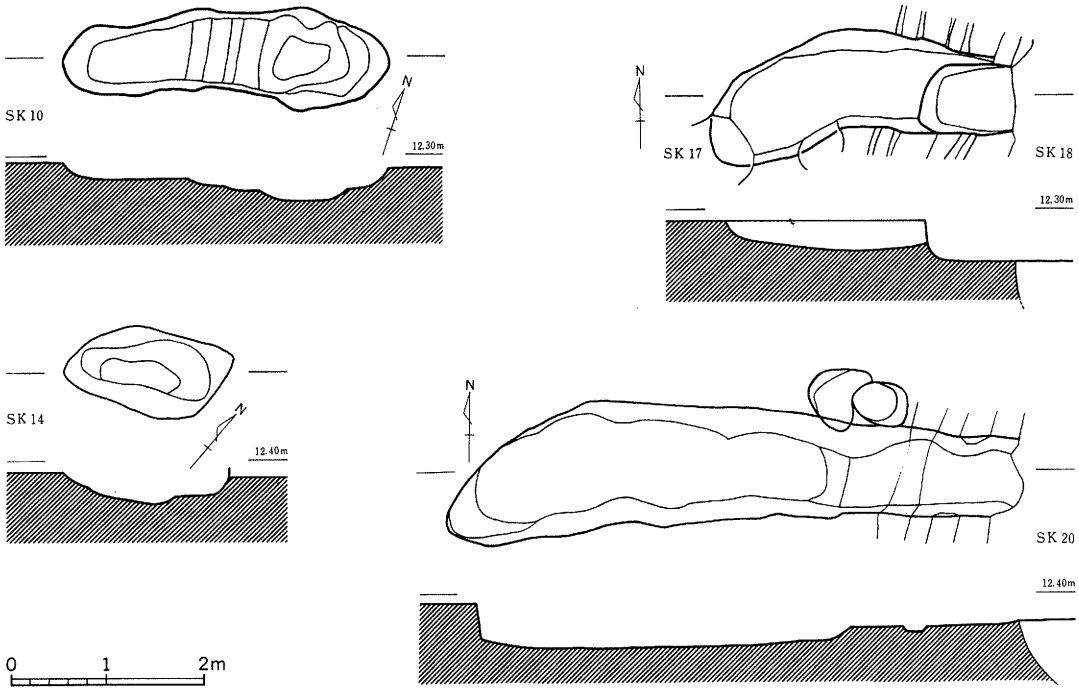
調査地区の南東隅部（27・28，15・16）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.62ｍ，短軸90cm，深さ35cmを計る。出土遺物は，弥生土器と弥生土器片再利用の紡錘車（第14図―No.202）である。No.202は，径4.0cm，厚さ0.4cm，孔径0.4～1.2cmを計る。

ＳＫ15

調査地区の南東隅部（27・28，15）区で検出された。平面形は長楕円形を呈し，規模は，長軸1.95ｍ以上，短軸90cm，深さ18cmを計る。ＳＫ12・16と重複しており，ＳＫ12に切られ，ＳＫ16を切っている。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ16

調査地区の南東隅部（27，15）区で検出された。北東～南西に長い楕円形の平面形になると想



第6図　土坑実測図（1/80）

定される。規模は，長軸90cm以上，短軸1.06m，深さ38cmを計る。ＳＫ12・15と重複しており，これらに切られている。当土坑の大部はＳＫ15により上半部を削平されている。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ17

調査地区の南東隅部（28・29，15）区で検出された。平面形は長楕円形を呈し，規模は，長軸3.06m以上，短軸1.03m，深さ30cmを計る。東側は現代の暗渠により上部が切られている。また，東端部は，ＳＫ18と現代の用水工事により切られている。西側は中世のピットにより切られ，西端部もこのピットによる削除のため，不明となっている。出土遺物は，弥生土器と弥生土器片再利用の紡錘車（第14図—No.203）である。No.203は，径4.9cm，厚さ0.4cm，孔径0.4cmを計る。

ＳＫ18

調査地区の南東隅部（29，15）区で検出された。東西に長い楕円形の平面形になると想定される。規模は，長軸97cm以上，短軸68cm，深さ44cmを計る。東側は現代の用水工事により切られている。また，ＳＫ17を切っている。当土坑の覆土は炭化物を多く含んだものであり，ＳＫ17と明確に区別できた。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ19

調査地区の南東隅部（28・29，15・16）区で検出された。平面形は長楕円形を呈し，規模は，

長軸3.50m以上，短軸1.00m，深さ36cmを計る。東側は現代の暗渠により上部が切られている。また，東端部は現代の用水工事により切られ，不明となっている。出土遺物は弥生土器である。土坑の規模に比べて出土量は極めて少ない。

ＳＫ20

調査地区の南東隅部（27～29，16）区で検出された。平面形は長楕円形を呈し，規模は，長軸6.04m以上，短軸1.22m，深さ52cmを計る。東側は現代の暗渠により上部が切られている。また，東端部は現代の用水工事により切られ，不明となっている。全体的に中世のピットにより切られるとともに，東寄り北側は弥生時代のピットに切られている。出土遺物は，弥生土器と弥生土器片再利用の紡錘車１点（第14図—No.204）である。弥生土器では，図示したNo.132（第11図）をはじめ，いくつかの土器が，土坑の東側よりまとまって出土した。No.204は製作途中のもので，中央の孔は貫通していない。形態は円径を示さないが，２次的に破損したものと考えられる。

３．溝

ＳＤ01

調査地区西側で検出されたコ字状に屈曲する大溝である。規模は，上面幅3.75～4.85m，底面幅2.50～3.10m，深さ90cmを計る。調査地区中央部西寄りでく字状に屈曲するこの溝は，一旦調査地区外へ延びるが，調査地区北西最端部を若干拡張し，北側の繋がりを確認するに至った。北西最端部で検出した落ち込みは，形状や覆土の状態よりく字状の溝と同一のものとしてよいと判断した。大攪乱に切られ，ＳＫ06・07，ＳＤ07を切っている。

この溝の土層断面図は第７図に示した通りである（断面の位置は第４図に明示）が，土層は基本的に次のように大きく区分される。

第Ⅰ層；第１層で中世の遺物を包含している。

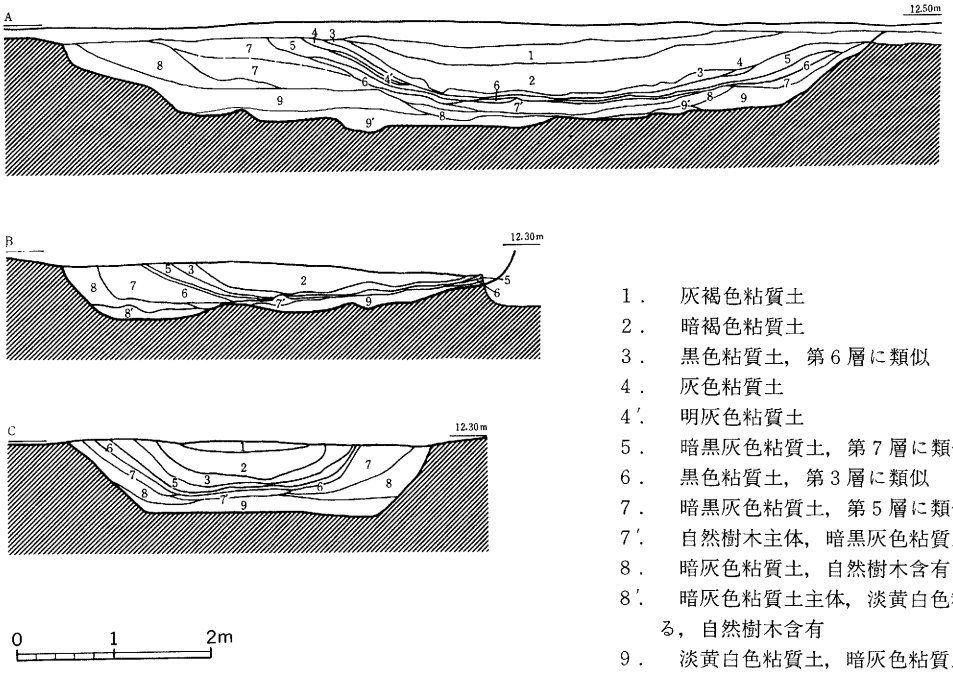
第Ⅱ層；第２層。

第Ⅲ層；第３～７層，第４層を一部含んでいるが，黒色粘質土の第３・６層と暗黒灰色粘質土の第５・７層が交互に堆積している部分。

第Ⅳ層；第７層，自然樹木の主要堆積層。

第Ⅴ層；基盤層のブロックである淡黄白色粘質土を中心に，暗灰色粘質土，自然樹木を含む。

最下層の第Ⅴ層は，基盤層ブロックと地山である基盤層との区別が不分明で，発掘調査に当たっては，弥生土器や自然樹木の出土，暗灰色粘質土の存在を手掛かりに掘り進んだ。溝の掘削後，短かい期間で堆積した土層と考えられる。この上に自然樹木が多量に見られたのであるが，溝が開口しており，溝底や溝付近にあった樹木が堆積したのであろう。第Ⅲ層については，土層が弧状に見られ，自然堆積したものである。第Ⅱ層までは弥生土器の包含層であり，その後，ある程



1．　灰褐色粘質土
2．　暗褐色粘質土
3．　黒色粘質土，第６層に類似
4．　灰色粘質土
4′．　明灰色粘質土
5．　暗黒灰色粘質土，第７層に類似
6．　黒色粘質土，第３層に類似
7．　暗黒灰色粘質土，第５層に類似
7′．　自然樹木主体，暗黒灰色粘質土
8．　暗灰色粘質土，自然樹木含有
8′．　暗灰色粘質土主体，淡黄白色粘質土が混る，自然樹木含有
9．　淡黄白色粘質土，暗灰色粘質土を一部含む，自然樹木含有
9′．　淡黄白色粘質土・明灰色粘質土混合土，自然樹木含有

第７図　SD01断面図（1/80）

度，溝状の凹みのまま開口しており，中世を向えたと考えられる。

出土遺物は，弥生土器・自然樹木が中心で，これ以外に弥生土器片再利用の紡錘車４点（第14図—No.205～208），フレイクである。弥生土器の出土量は遺構の規模に比べて少ない。また小破片・細片がほとんどを占める。その主なるものを第12図に示した。この中で，No.133とNo.141は当溝がＳＫ07を切り込んでいる部分から出土したもので，ＳＫ07に所属させた方がよいのかもしれない。紡錘車の計測値は以下の通りである。

１．No.205，径5.2，厚さ0.7，孔径0.6～0.9cm。

２．No.206，径4.7，厚さ0.4，孔径0.6～0.8cm。

３．No.207，径5.7，厚さ0.6，孔径0.4～1.2cm。

４．No.208，径4.9，厚さ0.3，孔径0.4～0.6cm。

なお，No.205～207の３点は完存品であるが，No.208は約３分の１欠損している。

ＳＤ02

調査地区中央部西寄りで検出された北北東～南南西に走る溝。規模は，長さ14.65m，幅1.10～1.90m，深さ31cmを計る。調査地区を横断する形となり，北側及び南側は調査地区外となる。途中に大攪乱があり，分断されている。出土遺物は弥生土器である。

ＳＤ07

調査地区中央部北西側で検出された北東～南西に走る溝。規模は，長さ2.78m，幅1.04～1.88m，深さ39cmを計る。北側は調査地区外となり，南側はＳＤ01及び大攪乱によって切られている。よって一部分のみしか検出できなかった。出土遺物は弥生土器である。

遺構	土器番号	器種	法量cm	特　　徴	色　調	残　量
SK02	101 第８図	壺	— (8.0) —	壺の頸部。幅広の貼り付け突帯が一条廻る。内面は刷毛目。外面は，突帯部が櫛描格子列点文。	淡褐色。	頸部残存。
	102 第８図	甕	14.5 (12.5) —	内面は，口縁上部が縄文，口縁下部が横ナデ，胴部が刷毛目。外面は，口唇部と胴上部が縄目，口縁部が横ナデ，胴中央・下部が刷毛目。	明赤褐色。 煤付着。	口縁部¼，胴部⅓残存。
	103 第８図	甕	14.4 (9.3) —	口縁部はく字状に折れる。口縁部は横ナデ。胴上半部は，内面がナデ，外面が刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁・胴上半部¼残存。
SK05	104 第８図	壺	13.2 (10.4) —	口唇部は横ナデ，櫛状具による刻目が部分的に付く。口縁部は横ナデ。胴上部は，内面が刷毛目・ナデ，外面が刷毛目。	明赤褐色。	口縁部，胴上部少量残存。
	105 第８図	壺	— (17.6) —	頸部は刷毛目。胴上半部は，内面が刷毛状具・ナデ，外面が刷毛目・ヘラ磨き。胴下半部は，内面が刷毛目，外面が刷毛目・ヘラ磨き。	明褐色。 煤付着。	頸・胴部残存。
	106 第８図	壺	15.9 (10.0) —	頸部に幅広の貼り付け突帯が一条廻る。口端部は，内面が櫛描羽状列点文，外面が櫛描斜行列点文。突帯部は櫛描格子列点文。	明褐色。 磨滅している。	口縁部，肩部少量残存。
	107 第８図	壺	— (13.3) 7.6	壺の胴下・底部。内面はナデ？。外面はナデ・ヘラ磨き？	明褐色。 磨滅している。	胴下・底部残存。
	108 第９図	壺	15.4 (4.8) —	口端部内面は，櫛描羽状列点文が２段。口縁部は，内面が横ナデ・刷毛目，外面が刷毛目。	灰褐色。	口縁部¼残存。
	109 第９図	壺	10.5 (6.3) —	口縁部が片口状になる。頸部に幅狭の突帯が一条廻る。口端部外面は櫛描斜行列点文。突帯部は櫛描格子列点文。胴上部は櫛描波状文。	灰褐色。	口縁部¾，胴上部¼残存。
	110 第９図	甕	15.3 (17.6) 4.7	口端部は，横ナデで外面に櫛描刻目文。口縁・胴部は刷毛目。底部はナデ。	灰褐色。 煤付着。	ほぼ完形。
	111 第９図	甕	17.7 (15.0) —	口端部は，内面が櫛描羽状列点文，外面が横ナデ。口縁部は刷毛目。胴部は，内面がナデ，外面が刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁部⅓，胴部¾残存。
	112 第９図	甕	17.2 (9.6) —	張りのない胴上部より，口縁部は緩く外反する。口端部外面は櫛描刻目文。口縁・胴上半部は刷毛目。	明赤褐色。 煤付着。	口縁・胴上半部¼残存。
	113 第９図	甕	16.9 (16.1) —	口端部は横ナデ，外面に櫛描刻目文。口縁部は刷毛目。胴部は，内面がヘラ状具・ナデ・刷毛目，外面が刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁部，胴部¾残存。

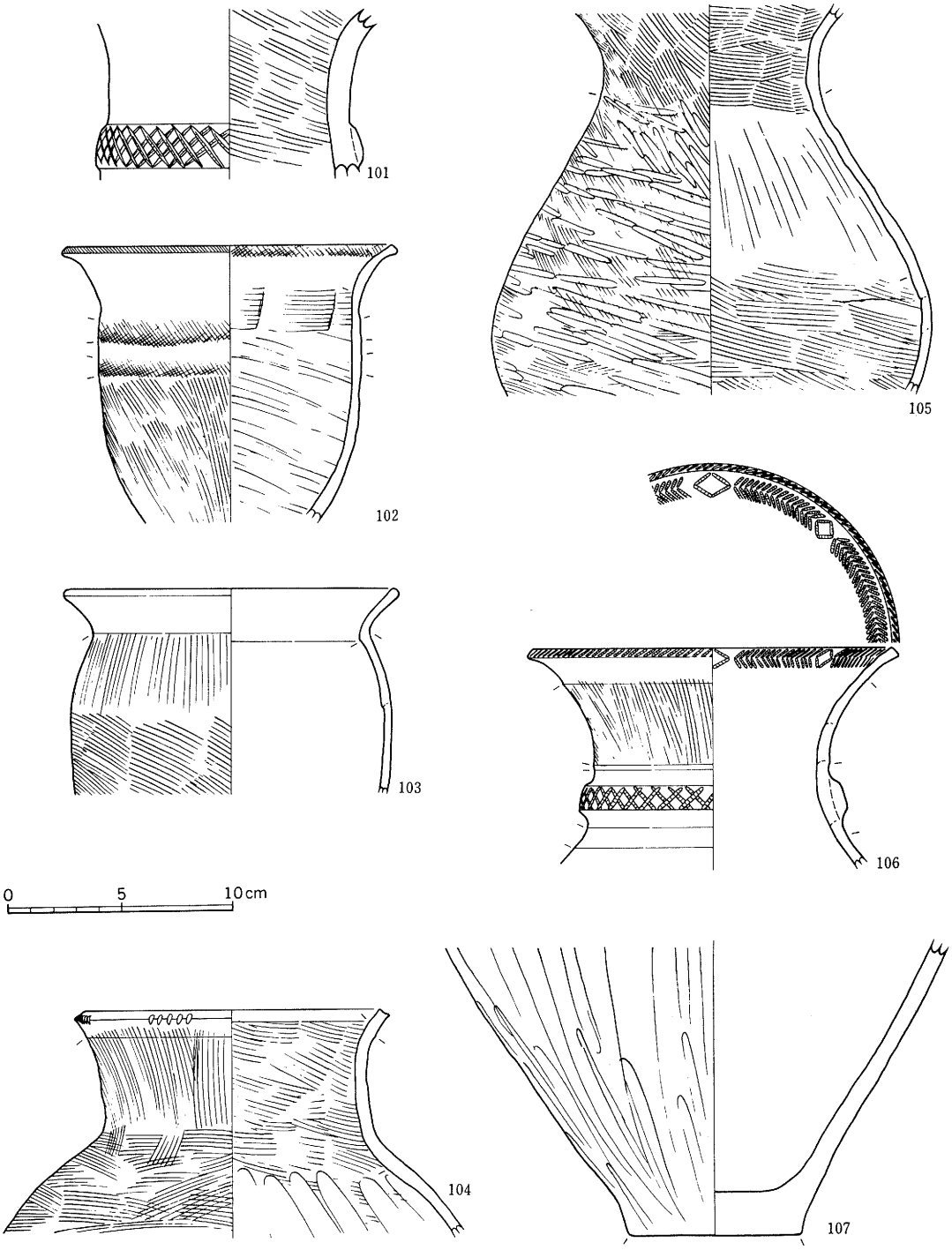
第１表　弥生土器観察表〔１〕

遺構	土器番号	器種	法量cm	特　　徴	色　調	残　量
SK05	114 第9図	甕	— (10.9) 5.4	甕の胴下・底部。内面はナデ・刷毛目。外面は刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	胴下・底部残存。
SK06	115 第10図	鉢	16.6 (8.0) 6.2	内面は，口縁部・体部が刷毛目，底部がナデ。外面は，口縁部が横ナデ，体上部が指圧・ナデ，体下部が刷毛目，底部がナデ。	灰褐色。	口縁・体部⅓，底部残存。
	116 第10図	壺	20.2 (4.0) —	口端部は，内面が櫛描羽状列点文，外面が櫛描刻目文・横ナデ。口縁部は刷毛目。	灰褐色。	口縁部¼残存。
SK10	117 第10図	甕	18.0 (15.6) —	内面は，口端部が2段の櫛描斜行列点文，口縁部が刷毛目，胴部がナデ。外面は刷毛目，胴上部に3段の櫛描斜行列点文。	灰褐色。 煤付着。	口縁部⅓，胴部¼残存。
	118 第10図	甑	— (5.4) 5.2	底部中央に径0.6～1.2cmの孔。胴下部は，内面が刷毛目・指圧・ナデ，外面が刷毛目・ナデ？底部は，内面が指圧，外面がヘラ削り。	灰褐色。 煤付着。	底部残存。
SK12	119 第10図	壺	15.8 (3.8) —	受口気味の口縁部。外面口唇部直下には，瘤状突起が廻る。	明褐色。	口縁部少量残存。
SK14	120 第10図	壺	7.5 (2.6) —	口端部は横ナデ。口縁部は刷毛目・横ナデ。	明褐色。	口縁部少量残存。
SK15	121 第10図	壺	23.3 (2.7) —	口端部は，内面が櫛描斜行列点文・櫛描羽状列点文，外面が櫛描刻目文。口縁部外面は刷毛目。	褐色。	口縁部少量残存。
	122 第10図	壺	12.9 (5.9) —	口端部は横ナデ。口縁部は刷毛目。肩部内面はナデ。	灰褐色。	口縁部¼残存。
	123 第10図	壺	11.3 (6.3) —	内面は，口端部が横ナデ，口縁・胴部は刷毛目。外面は，口縁部が横ナデ，胴上部が刷毛目。胴中央部がヘラ磨き。	灰褐色。	口縁・胴上中央部¼残存。
	124 第10図	甕	26.1 (7.4) —	口縁部は波状になる。口縁・胴上部は刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁部¼，胴上部少量残存。
SK17	125 第11図	壺	13.0 (12.3) —	口端部は横ナデ。口縁・胴上半部は，内面が刷毛目，外面が刷毛目・ナデ・ヘラ磨き。	明赤褐色。 灰褐色。	口縁部⅓，胴上部¼残存。
	126 第11図	壺	— (6.5) 5.8	壺の胴下・底部。胴下部は，内面が刷毛目・ナデ，外面が刷毛目・ヘラ磨き。底部はナデ。	褐色。	胴下部¼，底部残存。
	127 第11図	壺	9.6 (5.9) —	無頸壺。口縁部は，内面が指圧・ナデ，外面が櫛描羽状列点文。	明褐色。 磨滅している。	口縁部¼残存。
	128 第11図	甕	14.6 (6.7) —	口端部は横ナデ。口縁部は，内面が横ナデ，外面が刷毛目。胴上部は，内面が刷毛目・ナデ，外面がナデ。	灰褐色。 煤付着。	口縁・胴上部¼残存。
	129 第11図	甕	17.4 (7.2) —	内面は，口縁部が横ナデ，胴上部がナデ。外面は，口端部が横ナデ，口縁・胴上部が刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁・胴上部¼残存。

第2表　弥生土器観察表〔2〕

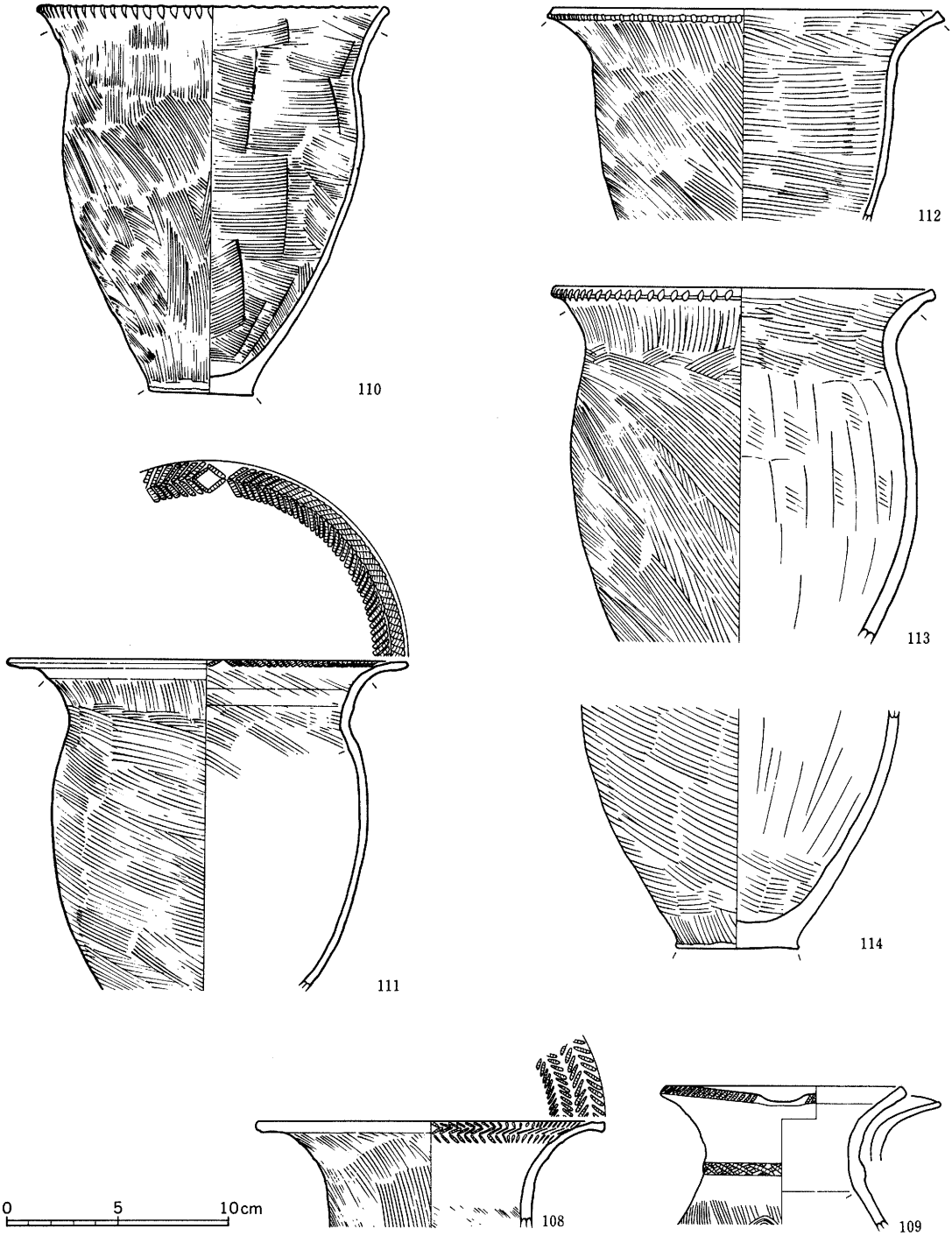
遺構	土器番号	器種	法量cm	特　　徴	色　調	残　量
SK20	130 第11図	壺	10.0 (3.1) —	無頸壺。口縁部外面は櫛描斜行列点文・櫛描羽状列点文。	淡褐色。	口縁部¼残存。
	131 第11図	甕	24.0 (4.6) —	口端部は，内面が櫛描羽状列点文，外面が櫛描刻目文。口縁部は横ナデ。肩部内面は刷毛目。	暗灰褐色。 淡灰褐色。 煤付着。	口縁部⅓，肩部少量残存。
	132 第11図	甕	22.7 (31.0) 6.0	口端部は，内面が横ナデ，外面が櫛描格子列点文。口縁・胴上半部は刷毛目。胴下半部は，内面が刷毛状具・ナデ，外面が刷毛目。	明褐色。	¾残存。
SD01	133 第12図	器台	— (5.6) 7.8	器台の底部と脚部。貼り付け突帯が一条廻る。内面はナデ。外面は刷毛状具。	褐色。	底・脚部残存。
	134 第12図	器台	— (4.4) 6.4	器台の底部と脚部。底部外面は円形刺突文。	暗灰褐色。	底・脚部残存。
	135 第12図	壺	10.9 (6.6) —	口縁部は刷毛目。頸部は，内面がナデ，外面が刷毛目。	明褐色。	口頸部⅓残存。
	136 第12図	壺	15.5 (8.8) —	口端部は横ナデ。口縁部は刷毛目。頸部は，内面が刷毛目，外面が2条の箆描沈線文と櫛描列点文。	淡褐色。	口縁部，頸部¼残存。
	137 第12図	壺	16.9 (11.7) —	口端部は，内面が櫛描羽状列点文・横ナデ，外面が横ナデ。口縁・胎上部は，刷毛目で一部に横ナデ・ナデ。	灰褐色。	口縁部⅓，胴上部少量残存。
	138 第12図	壺	18.8 (11.1) —	口端部は横ナデ。口縁・肩部は刷毛目。	明赤褐色。 灰褐色。	口縁・肩部⅓残存。
	139 第12図	壺	15.9 (4.5) —	口端部は，内面が櫛描羽状列点文・横ナデ，外面が横ナデ。口縁部は，内面が横ナデ，外面が刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁部少量残存。
	140 第12図	甕	15.9 (5.7) —	口端部は刻目文。口縁部は，横ナデで外面に細い一条の沈線。頸部は刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁部¼，頸部少量残存。
	141 第12図	甕	20.4 (25.1) 8.4	口縁部は横ナデ。胴上半部外面は，櫛描による一段の平行線文と6段の波状文。胴上半部と下半部との境外面に刻目。	明赤褐色。 淡褐色。 煤付着。	口縁・胴部⅓欠損。
SD07	142 第13図	甕	15.2 (14.2) —	口端部は横ナデ。口縁・胴部は刷毛目。	暗褐色。 煤付着。	口縁・胴上部⅓，胴中央下部¼残存。
	143 第13図	甕	17.7 (9.9) —	口縁部は，横ナデで口端部内面に櫛描羽状列点文。胴上部は刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	口縁・胴上部¼残存。
	144 第13図	甕	— (7.0) 7.5	甕の胴下・底部。胴部は刷毛目。	灰褐色。	胴下・底部残存。
	145 第13図	甕	— (4.5) 5.7	甕の胴下・底部。胴部は刷毛目。	灰褐色。 煤付着。	胴下・底部残存。

第3表　弥生土器観察表〔3〕



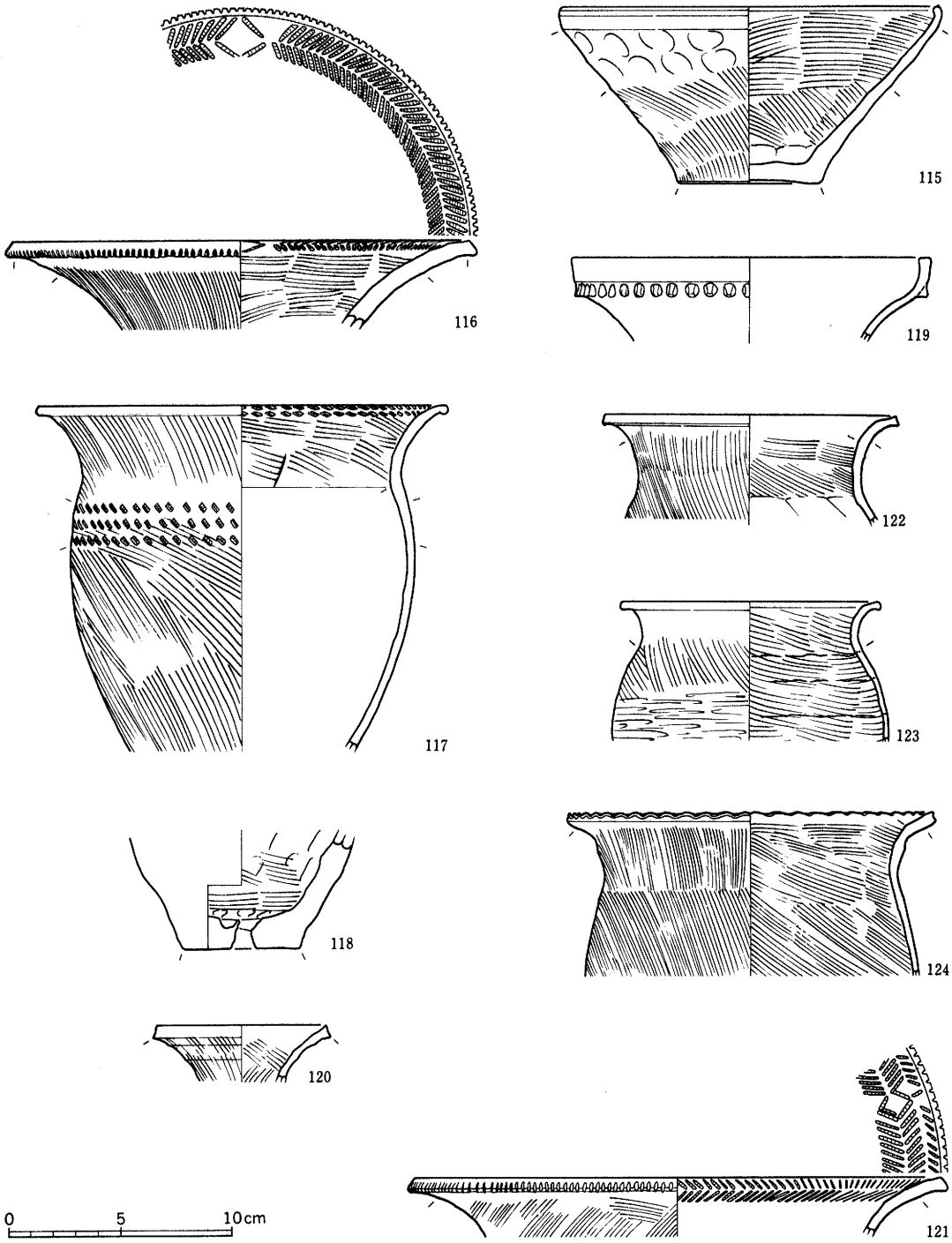
第8図　弥生土器実測図〔1〕（1/3）

ＳＫ02；101～103，ＳＫ05；104～107



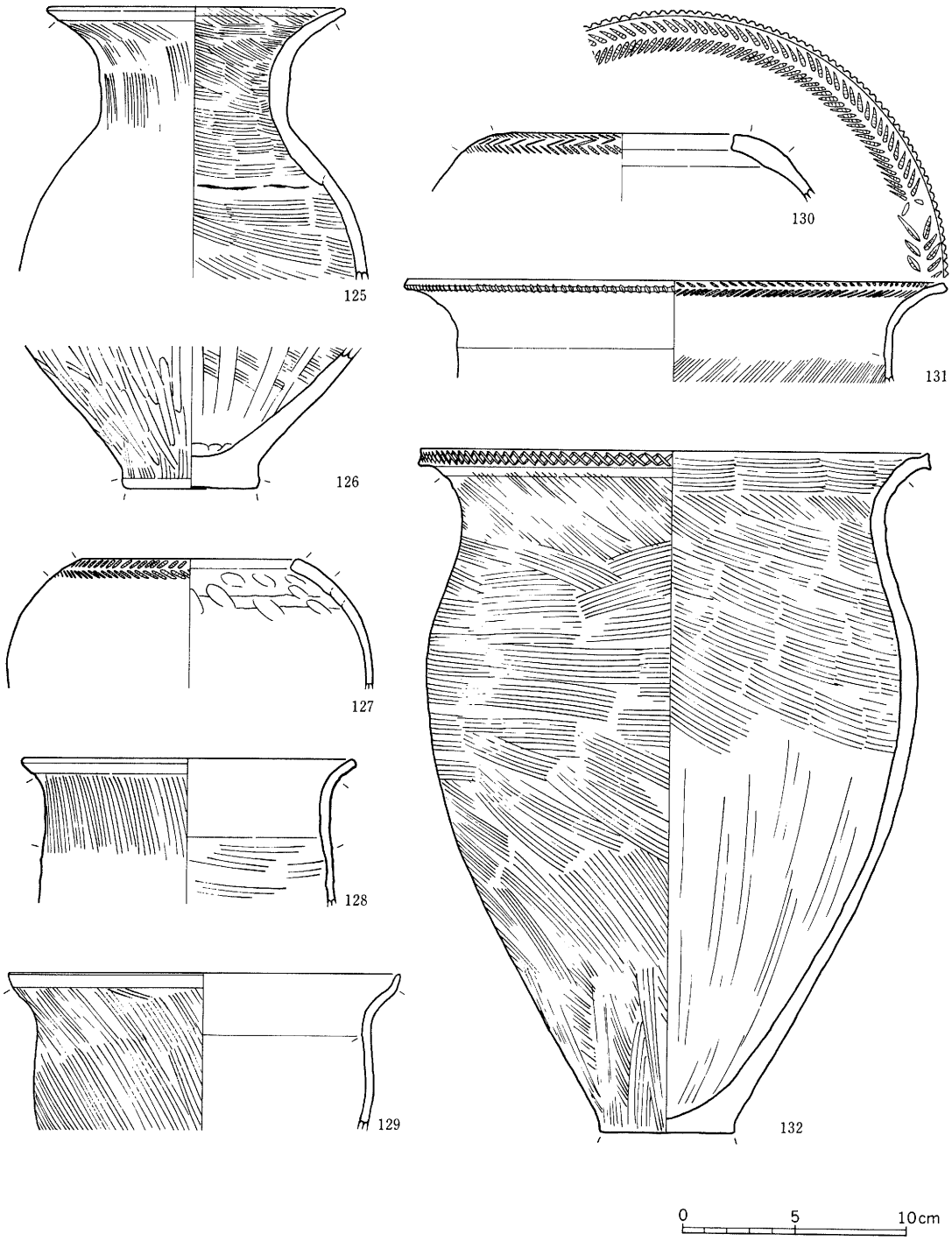
第９図　弥生土器実測図〔２〕（１/３）

ＳＫ05；108～114



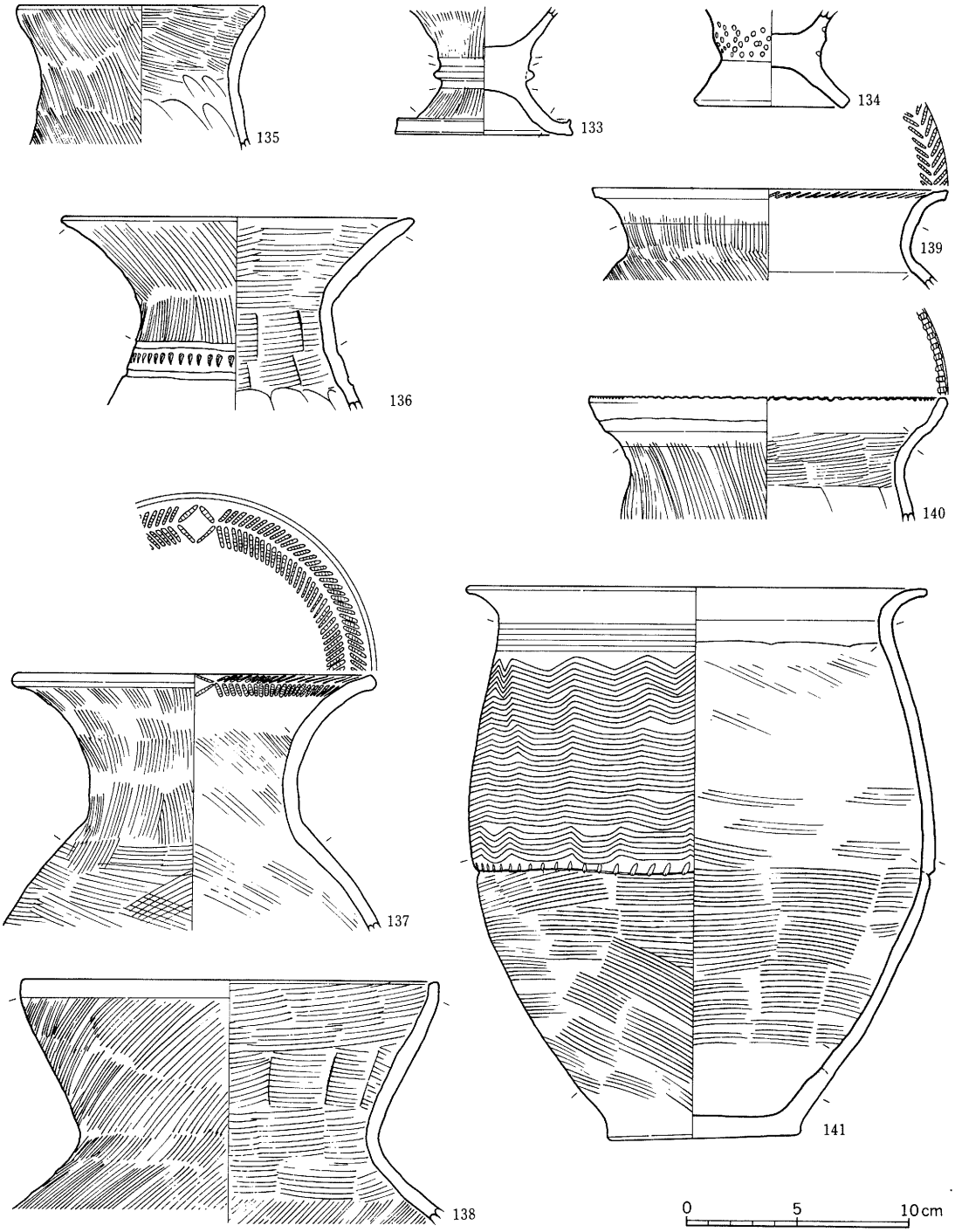
第10図　弥生土器実測図〔3〕（1/3）

SK06；115･116，SK10；117･118，SK12；119，SK14；120，SK15；121～124



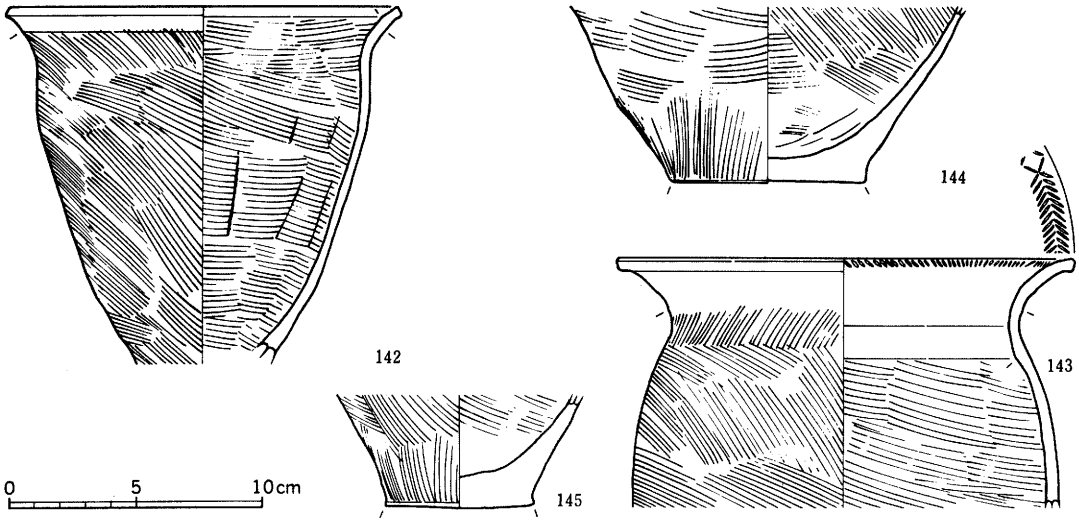
第11図　弥生土器実測図〔4〕(1/3)

ＳＫ17；125～129，ＳＫ20；130～132



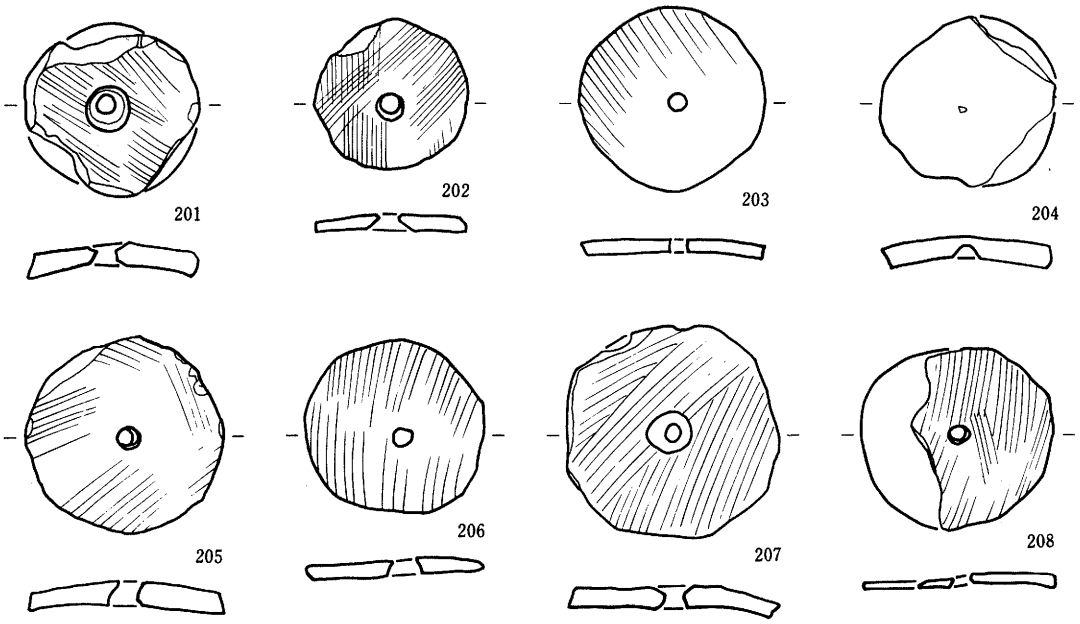
第12図　弥生土器実測図〔5〕(1/3)

S D01；133～141



第13図　弥生土器実測図〔6〕(1/3)

S D07 ; 142～145



第14図　土製紡錘車実測図 (1/2)

V 中　世

1．概　況

中世の遺構は以下のものが検出された。

井戸址４基，ＳＥ01～04（曲物積上げ井戸３基，縦板組隅柱横桟どめ井戸１基）

土坑５基，ＳＫ01・03・04・08・21

溝４条，ＳＤ03～06

中世の遺物，土師質土器，珠洲の表土からの出土は，調査地区全域に見られるものであるが，遺構の分布は，調査地区の東側に偏っている。すなわち，調査地区中央を横断するＳＤ03より東側に上記のすべての遺構が位置している。また中世のピットが多数検出されたが，同様にＳＤ03より東側で検出された。

出土遺物は，土器類では土師質土器，珠洲が中心である。これ以外に少量ではあるが，輸入青磁，瀬戸，越前が出土した。また井戸址から木製品が出土している。

2．井 戸 址

ＳＥ01

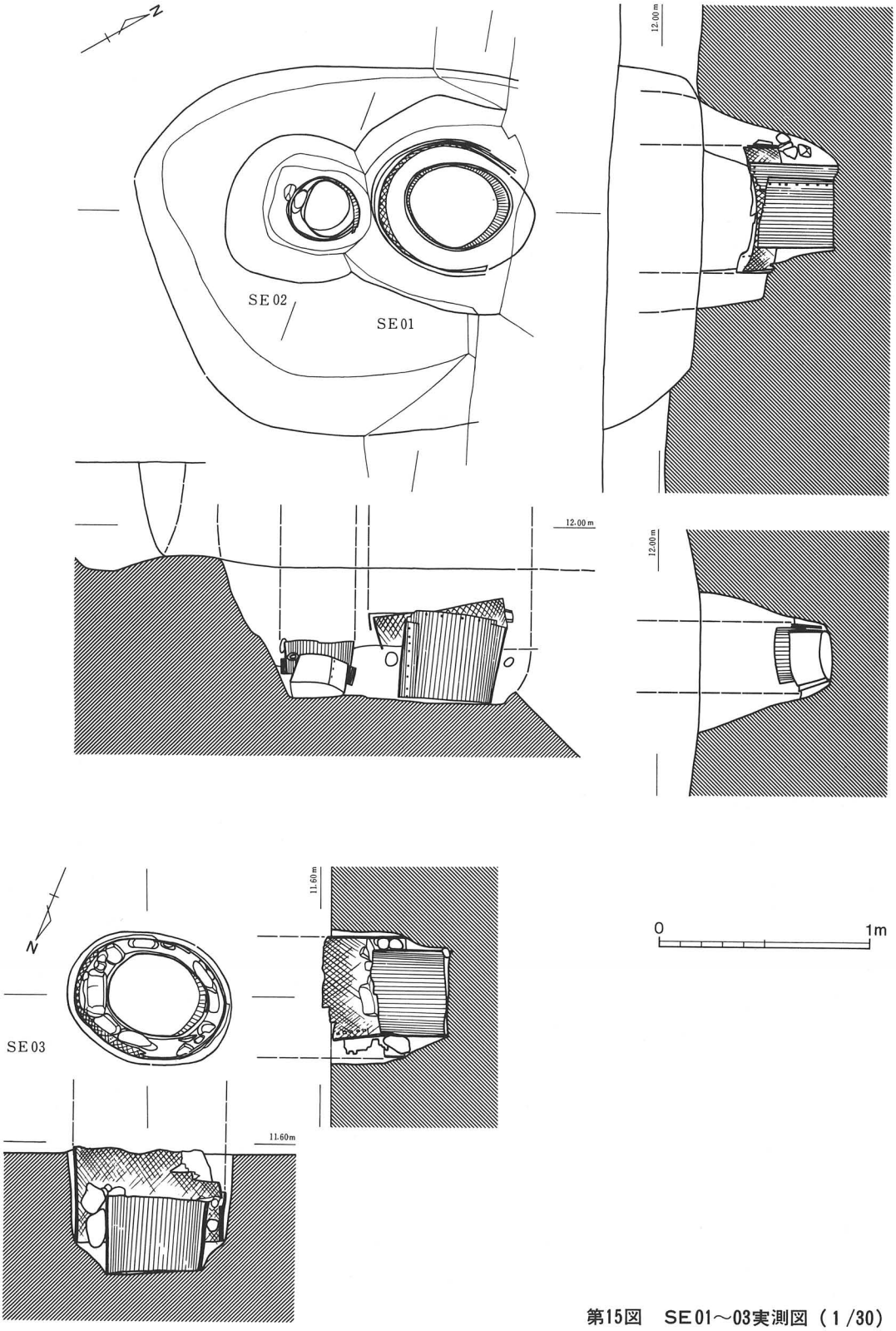
曲物積上げ井戸。当ＳＥ01及びＳＥ02の上方には土坑ＳＫ03が位置し，この土坑の下方より検出された。北側の一部は大攪乱により削平を受けている。すなわち，井戸側曲物の下部と水溜曲物のみ残存していた。

井戸の構造は，大型の曲物を用いて井戸側とし，その下部にやや小型の曲物を設定して水溜としている。ＳＫ03の底面から井戸底面までは65cm，ＳＫ03の上面からは 115cmを計る。井戸側掘り方は径約１ｍを示す。後述のＳＥ03と異なり明確な掘り方を有している。

井戸側曲物は，北側が残存していないが，この部分を想定して法量を記すと，内法で長軸73cm，短軸58cm，高さ最大18cmを計る。厚さ７mmの板材に，厚さ４mmのやや薄い板材を廻らしている。

水溜曲物は，内法で長軸45cm，短軸39.5cmの楕円形を示し，高さ42cmを計る。主要板材は厚さ６mmであり、これに厚さ４mmの薄い板材をタガとして３枚巻き付けて補強している。上から，10cm，13cm，15cmの幅を計る。

出土遺物は，土師質土器，珠洲，箸状木製品である。珠洲には図示した擂鉢No.605（第22図）がある。井戸址の上方より出土した。箸状木製製品は２点で，長さ18.1cmと 5.4cmのものである。水溜の底部近くから出土した。



第15図　SE01～03実測図（1/30）

ＳＥ02

曲物積上げ井戸。ＳＥ01の南側，ＳＫ03の下方に位置する。井戸側曲物の下部と水溜曲物のみ残存していた。

同類のＳＥ01・ＳＥ03と比べて小型の井戸である。小型の曲物を用いて井戸側とし，その下部にこれより小さい曲物を設定して水溜めとしている。深さはＳＥ01と同様である。井戸側掘り方は径約70cmを示す。掘り方と井戸側曲物との間，井戸側曲物と水溜曲物との間には，拳大の礫が置かれ，曲物を固定する役割を果している。水溜は井戸側の中央ではなく，北側へ寄り，ここで井戸側と接している。

井戸側曲物は，厚さ６mmの側板とその下方を２重に取り巻くタガより構成されている。側板は途中で欠損し，縫い合わせの樺も欠失している。タガより想定される法量を記すと，内法で径30～31cmの円形を示し，高さ最大18cmを計る。タガは，外法で長軸36.5cm，短軸32.5cm，幅８cm，厚さ４mmを計る。タガの上下端には，釘留のための小孔が付く。

水溜曲物は，厚さ３mmの薄い板材を用い，側板とその下方を取り巻くタガより構成されている。側板は，内法で26cmの円形を示し，高さ最大13.5cmを計る。タガは，外法で27.5～28.5cmの円形を示し，幅4.5cmを計る。側板及びタガの下端には，釘留のための小孔が付く。

出土遺物は，土師質土器，珠洲である。珠洲には図示した擂鉢No.601（第21図）がある。井戸址の上方より出土した。

ＳＥ03

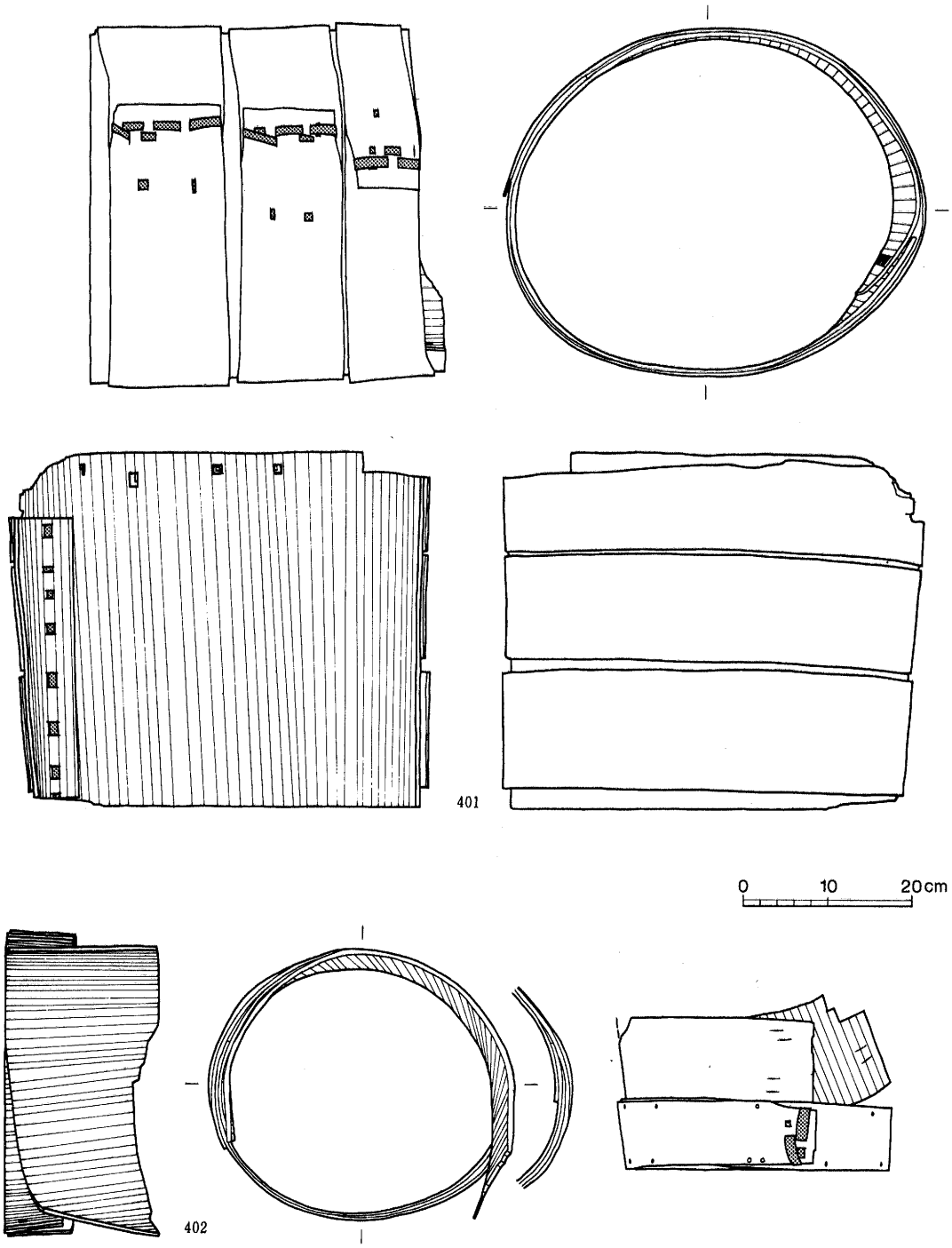
曲物積上げ井戸，大攪乱の西端部で検出された。すでに同様の曲物積上げ井戸ＳＥ01を検出していたので，曲物の出土により井戸と判断した。上方は削平されていたので，井戸側曲物の下部と水溜曲物のみ残存していた。

井戸の構造は，大型の曲物を用いて井戸側とし，その下部にやや小型の曲物を設定して水溜としている。検出面から底面までは，60cmを計る。井戸側曲物のための掘り方は明確ではなく，最小限掘り込んで曲物を埋め込んだものと考えられる。両方の曲物の間には大小の礫が置かれ，これによって水溜曲物を固定している。

井戸側曲物は残存状態が悪く，その内容を明確にできない。内法で長軸70cm，短軸55cmの楕円形を示し，高さ最大47cmを計る。厚さ７mmの板材に，厚さ４mmのやや薄い板材を廻らしている。

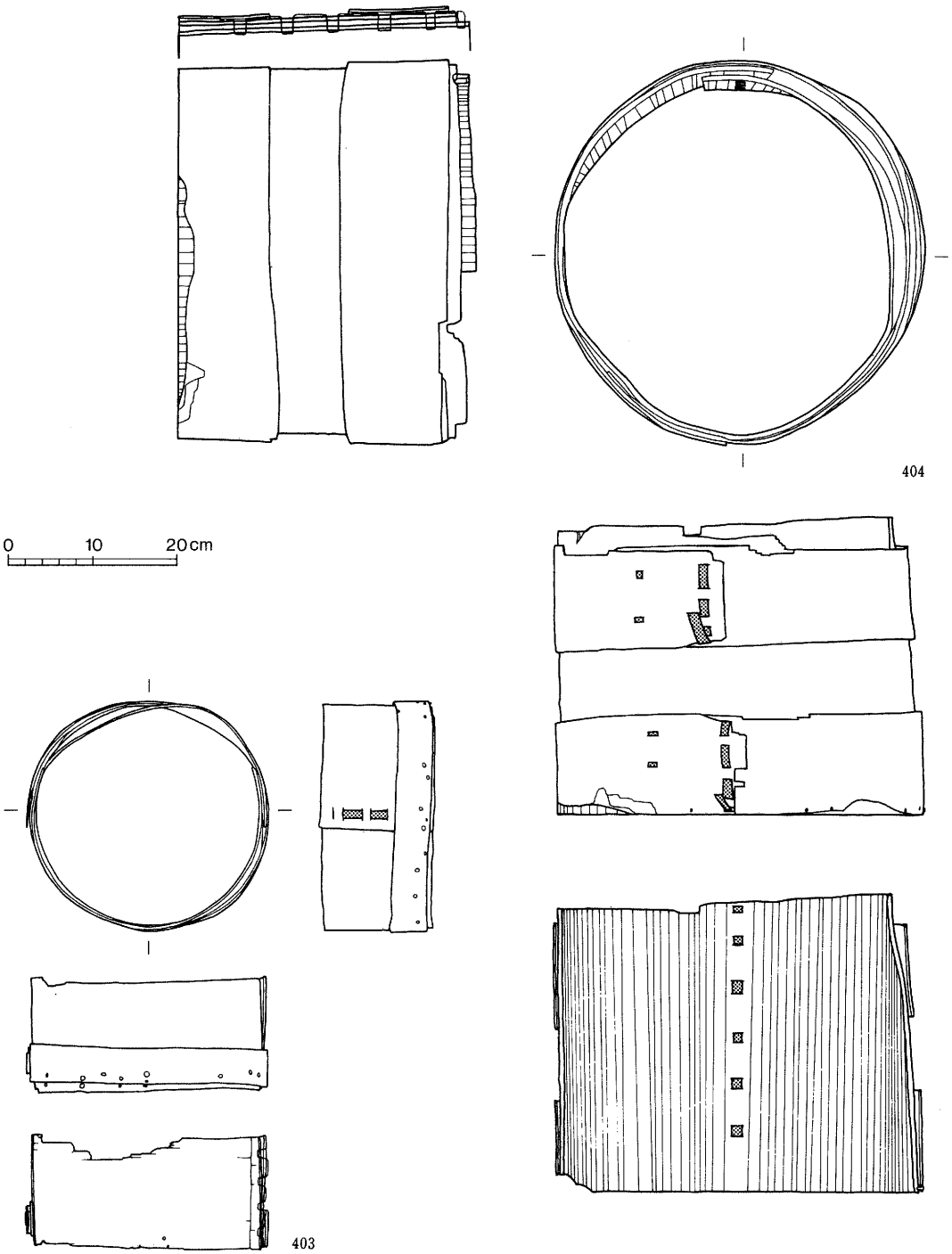
水溜曲物は，内法で40～42cmの円形を示し，高さ36cmを計る。主要板材は厚さ６mmであり，これの上方と下方２箇所に薄い板材をタガとして巻き付けて補強している。この板材は幅約12cm，厚さ４mmを計る。

出土遺物は，土師質土器，珠洲，木製小皿である。土師質土器は図示した小皿No.501（第20図）である。井戸側と水溜の間，礫群の中より出土した。木製小皿は，図示したNo.301（第19図）で，ＳＥ04出土のNo.302と類似している。ロクロによる調整が施されており，底面以外黒漆が塗られている。水溜の底部近くから出土した。



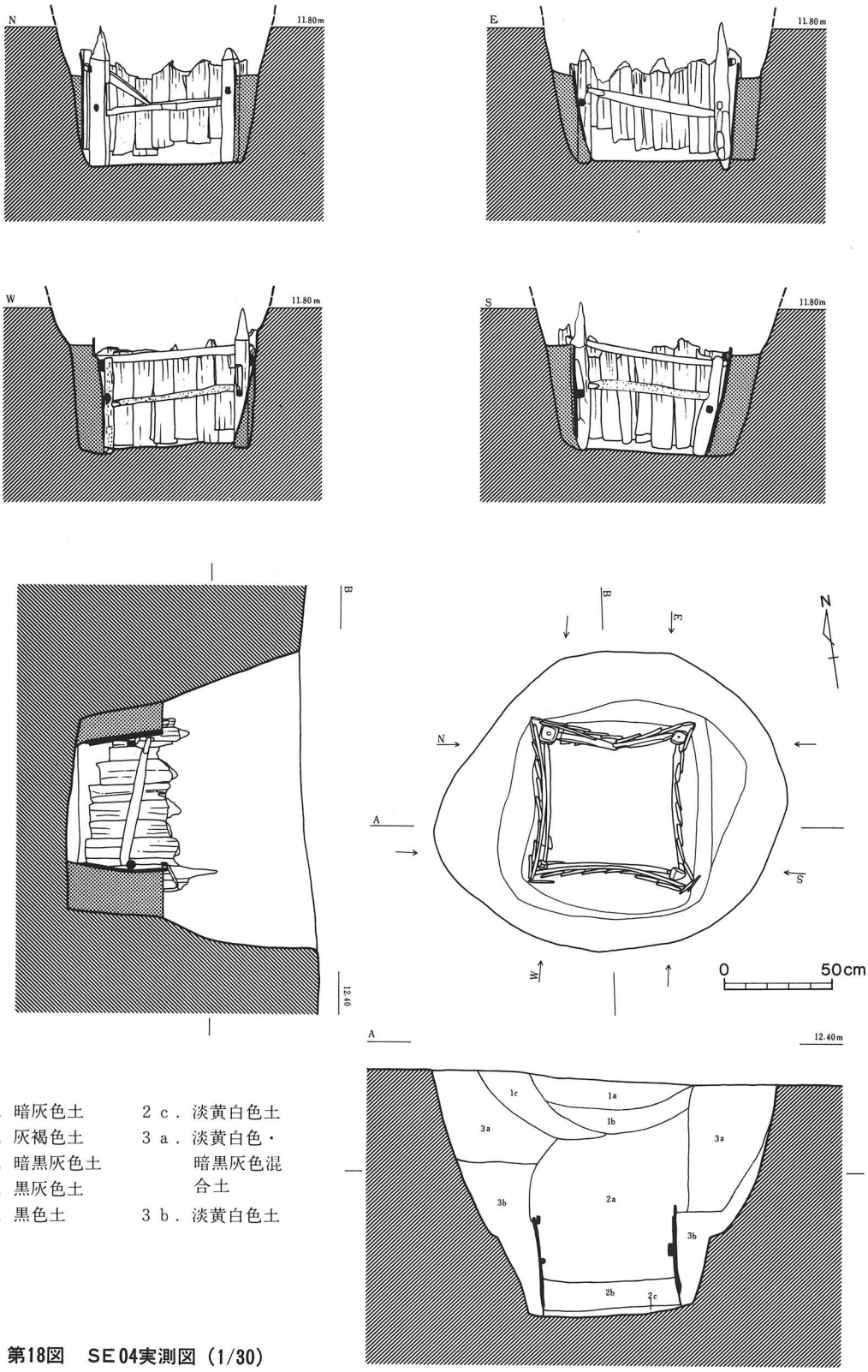
第16図　曲物実測図〔1〕(1/8)

SE01水溜曲物—401，SE02井戸側曲物—402



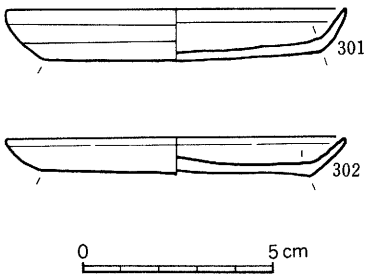
第17図　曲物実測図〔２〕(1/8)

SE02水溜曲物―403，SE03水溜曲物―404



1 a．暗灰色土
1 b．灰褐色土
1 c．暗黒灰色土
2 a．黒灰色土
2 b．黒色土
2 c．淡黄白色土
3 a．淡黄白色・暗黒灰色混合土
3 b．淡黄白色土

第18図　SE04実測図（1/30）



第19図　木製皿実測図（1/2）
SE03—301，SE04—302

ＳＥ04

縦板組隅柱横桟どめ井戸。当初覆土の状態より中世の土坑と考え掘り下げたが，木材の出土によって井戸と判明した。検出面でのプランは楕円形で，規模は長軸1.60ｍ，短軸1.38ｍを計る。約70cmの深さまではこのまま擂鉢状に緩く尖まり，これ以下は方形となり底面に至る。方形部分は，上位で一辺90cm，下位で一辺80cmを計る。検出面から底面までは，1.15ｍを計る。方形部分は掘り方本来の形状を止めているが，擂鉢状部分は井壁の崩壊を考えなければならない。

当時地上に設けられていたと考えられる井桁の部分は残存していなく，井戸側の下部のみ検出した。水溜用の特別な施設はなく，井戸側最下部がそのまま水溜の役割りを果している。井戸側は，板材を縦に打ち込んで方形の木組みを構成し，それを隅柱と横桟で補強している。板材は幅8.5～14.5cm，厚さ0.3～1.2cm，長さ最大51.2cmを計る。一つの壁は，添え板を加えて２枚一組となった板材を８組並べて形成されている。よって４壁で64枚の板材が使われている。北東・南東・北西の各隅には，これらとは別に板材が各１枚置かれている。隅柱は南西隅が丸太材で，他の３隅は角材となっている。長さ最大68.5cmを計る。横桟は，底面より約45cmと約30cmの位置の２段残存していた。上段は，南壁・西壁が完存，北壁が一部残存していたが，東壁は残存していなかった。この横桟は，隅柱と縦板の間に角材を挟んで支えるものである。下段は，北壁・東壁が角材，南壁・西壁が丸太材である。この横桟は，隅柱の枘穴にさし込んで組まれている。これら木組みは，土圧により各壁が内弯している。縦板の内法は一辺75cmを計る。

出土遺物は，土師質土器，珠洲，木製小皿，箸状木製品である。土師質土器，珠洲は井戸上部からの出土である。木製小皿は，図示したNo.302（第19図）で底面以外黒漆が塗られている。箸状木製品は，長さ15.2cmを計る。これらの木製品は，第18図で示した２ｂ層からの出土である。

３．土　　坑

ＳＫ01

調査地区南東隅部（26・27，15・16）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.84ｍ，短軸1.47ｍ，深さ54cmを計る。ピットに切られ，弥生時代の土坑ＳＫ13を切っている。出土遺物はなかったが，覆土の状態より中世のものと判断した。

ＳＫ03

調査地区東側中央部（25，19・20）区で検出された。ＳＥ01・02の上部に認められた落ち込み

を単独の土坑とした。ＳＥ01・02の井壁が崩れて，この掘り方が拡張した状態とするには不自然と考えたからである。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.82ｍ以上，短軸1.76ｍ，深さ50cmを計る。北側は大攪乱に切られている。また，ＳＫ04，ＳＤ04を切っている。出土遺物は，土師質土器，珠洲である。

ＳＫ04

調査地区東側中央部（25，19）区で検出された。ＳＥ01・02の南側に位置する。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸1.05ｍ以上，短軸1.02ｍ，深さ46cmを計る。北側はＳＫ03に切られている。出土遺物は，土師質土器，珠洲である。

ＳＫ08

調査地区東側中央部（24，19・20）区で検出された。平面形は円形を呈し，規模は，径90cm，深さ62cmを計る。ピットに切られ，ＳＤ04，弥生時代の土坑ＳＫ09を切っている。出土遺物は，土師質土器，珠洲である。土師質土器には図示した小皿No.502，No.503（第20図）がある。

ＳＫ21

調査地区東側中央部（26・27，18）区で検出された。ＳＥ04の西側に位置する。平面形は楕円形を呈し，長軸1.82ｍ，短軸1.06ｍ，深さ45cmを計る。ピットを切っている。出土遺物は，土師質土器，珠洲である。

4．溝

ＳＤ03

調査地区中央部で検出された北北東～南南西に走る溝。規模は，長さ7.45ｍ，幅2.40～2.84ｍ，深さ41cmを計る。北側は大攪乱に切られ，南側は調査地区外となる。ＳＤ04，弥生時代の土坑ＳＫ05を切っている。出土遺物は，土師器質土器，珠洲である。土師質土器には，図示した小皿No.504（第20図）がある。

ＳＤ04

調査地区中央部で検出された東北東～西南西に走る溝。規模は，長さ11.20ｍ，幅33～60cm，深さ14cmを計る。西側は調査地区外となる。東側はＳＥ01・02付近に達し，ＳＫ03に切られている。この溝を東北東側へ延長すると，調査地区北東端部の凹み・ピットに達する。途中は削平されているため不明であるが，本来，ＳＥ01・02の東北東へ延びていた可能性がある。なお，ＳＫ08，ＳＤ03，ピットに切られている。出土遺物は，土師質土器，珠洲である。

ＳＤ05

調査地区北東部で検出された北北東～南南西へ走る溝。規模は，長さ1.40ｍ，幅48～58cm，深さ11cmを計る。北側は調査地区外となり，南側は大攪乱に切られる。出土遺物は，土師質土器，

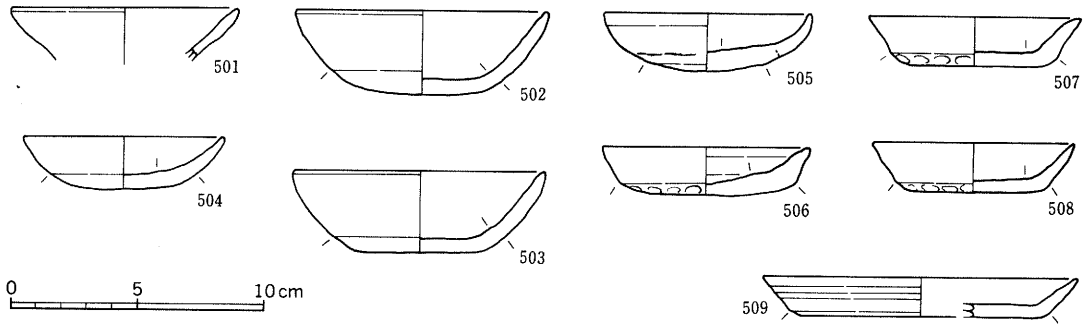
珠洲である。土師質土器には，図示した小皿No.505，No.506（第20図）がある。珠洲には，図示した壺No.610（第23図）がある。

ＳＤ06

調査地区北東部で検出された北東～南西へ走る溝。規模は，長さ1.42ｍ，幅43～73cm，深さ15cmを計る。北側は調査地区外となり，南側は大攪乱に切られる。出土遺物は，土師質土器，珠洲である。

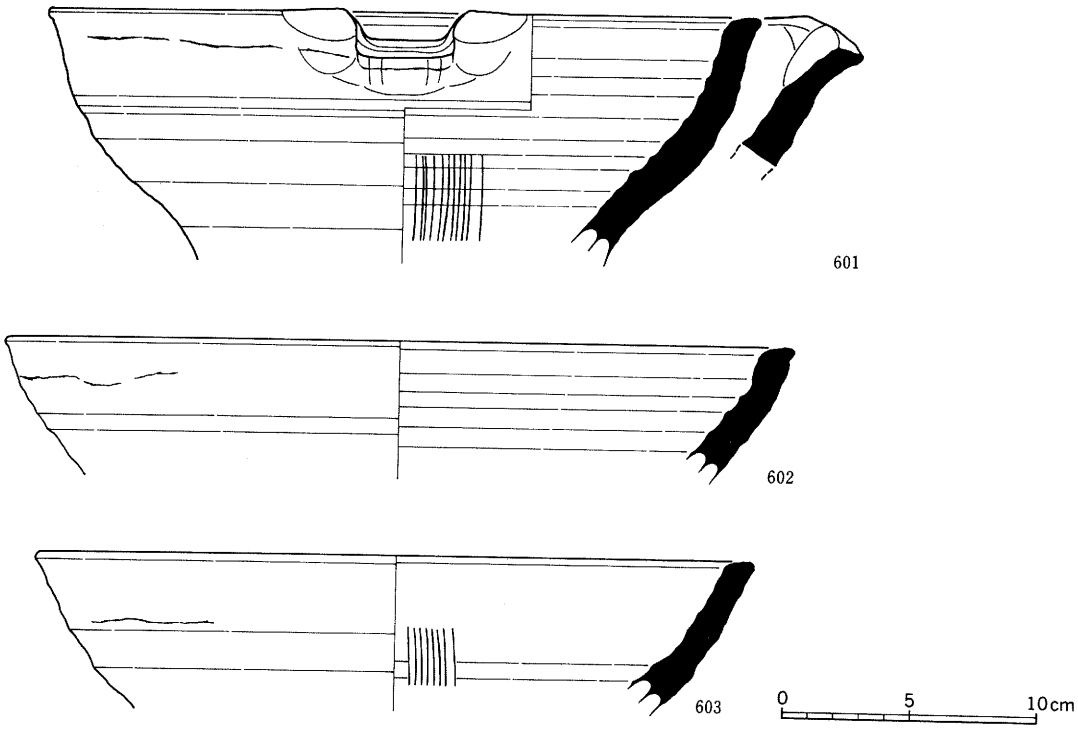
土器番品	器　種	遺　構	特　　徴
20－501	土師質皿	SE03	口径 8.8cm。口縁部は横ナデ。
20－502	〃	SK08	口径 9.8cm。器高 3.4cm。口縁部は横ナデ。底部はナデ。
20－503	〃	〃	口径 9.8cm。器高 3.3cm。口縁部は横ナデ。底部はナデ。
20－504	〃	SD03	口径 7.8cm。器高 2.1cm。口縁部は横ナデ。底部はナデ。
20－505	〃	SD05	口径 8.0cm。器高 2.4cm。口縁部は横ナデ。底部はナデ。
20－506	〃	〃	口径 8.0cm。器高 2.0cm。口縁部は横ナデ。底部はナデで外面に指圧。
20－507	〃	表　土	口径 8.2cm。器高 2.0cm。口縁部は横ナデ。底部はナデで外面に指圧。
20－508	〃	〃	口径 7.8cm。器高 2.0cm。口縁部は横ナデ。底部はナデで外面に指圧。
20－509	〃	〃	口径10.2cm。器高 1.6cm。口縁部は横ナデ。底部はナデで外面に指圧。
21－601	珠洲・鉢	SE02	口径27.6cm。片口擂鉢。内弯した口縁部より，口端部はやや外反する。
21－602	〃	表　土	口径30.6cm。片口への移行部が見られる。オロシ目は確認できない。
21－603	〃	〃	口径28.0cm。内弯した体部より口縁部は直線的に拡がる。オロシ目は疎。
22－604	〃	〃	口径25.4cm。口縁部は直線的に延び，口端面は外傾する。
22－605	〃	SE01	底径10.3cm。オロシ目は12条で底部で交差する。底部は静止糸切り。
22－606	〃	表　土	底径12.1cm。オロシ目は13条で比較的密。底部は静止糸切り。
22－607	〃	〃	底径11.5cm。オロシ目は12条で比較的密。底部は静止糸切り。
22－608	〃	〃	口径36.8cm。口端面は水平になり櫛目波状文が廻る。オロシ目は密。
23－609	〃	〃	口径40.4cm。口端面は水平になり櫛目波状文が廻る。オロシ目は密。
23－610	珠洲・壺	SD05	口径 8.8cm。小型の壺。口端部はやや肥行し，端面は外傾する。
23－611	〃	表　土	口径12.2cm。小型の壺。口端部はやや肥行し，端面は外傾する。
23－612	〃	〃	口径16.2cm。中型の壺。口縁部は緩く外反する。
23－613	珠洲・甕	〃	口径35.2cm。口頸部は弓なりに短く屈曲する。
23－614	〃	〃	口径43.8cm。口頸部はく字状に屈曲し，口端部は角縁状に肥厚する。
23－615	〃	〃	口径約60.4cm。口頸部は鋭く屈曲し，口端部は玉縁部に肥厚する。
23－616	〃	〃	口径約50.0cm。口縁部は緩く外反し，口端部はやや尖まる。
23－617	〃	〃	口径約67.4cm。口頸部は鋭く屈曲し，口端部はやや尖まる。
23－618	〃	〃	口径約66.2cm。口縁部外上方へ比較的大きく開く。

第４表　中世土器・陶器観察表



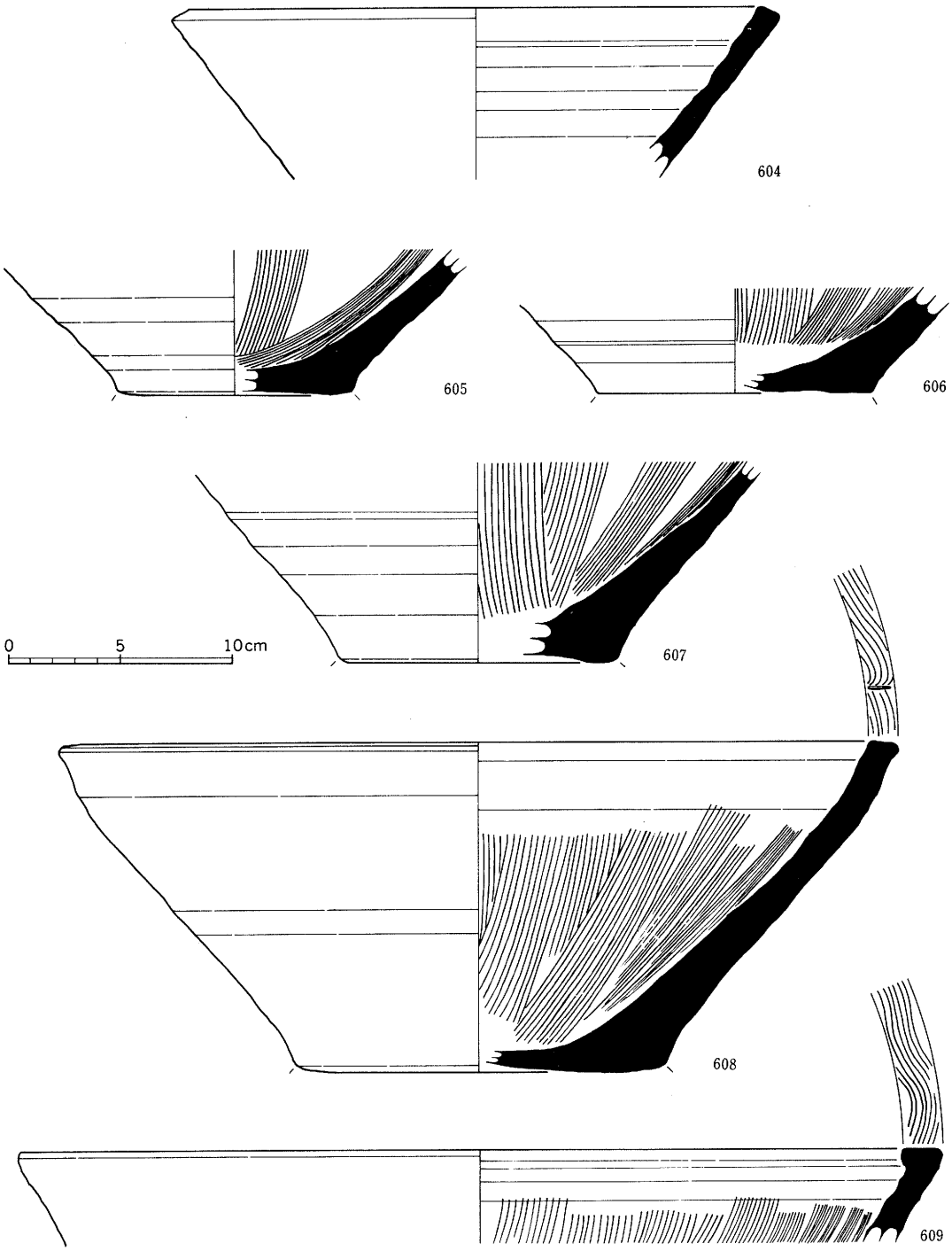
第20図　中世土器実測図（1/3）

ＳＥ03；501，ＳＫ08；502・503，ＳＤ03；504，ＳＤ05；505・506，表土；507～509



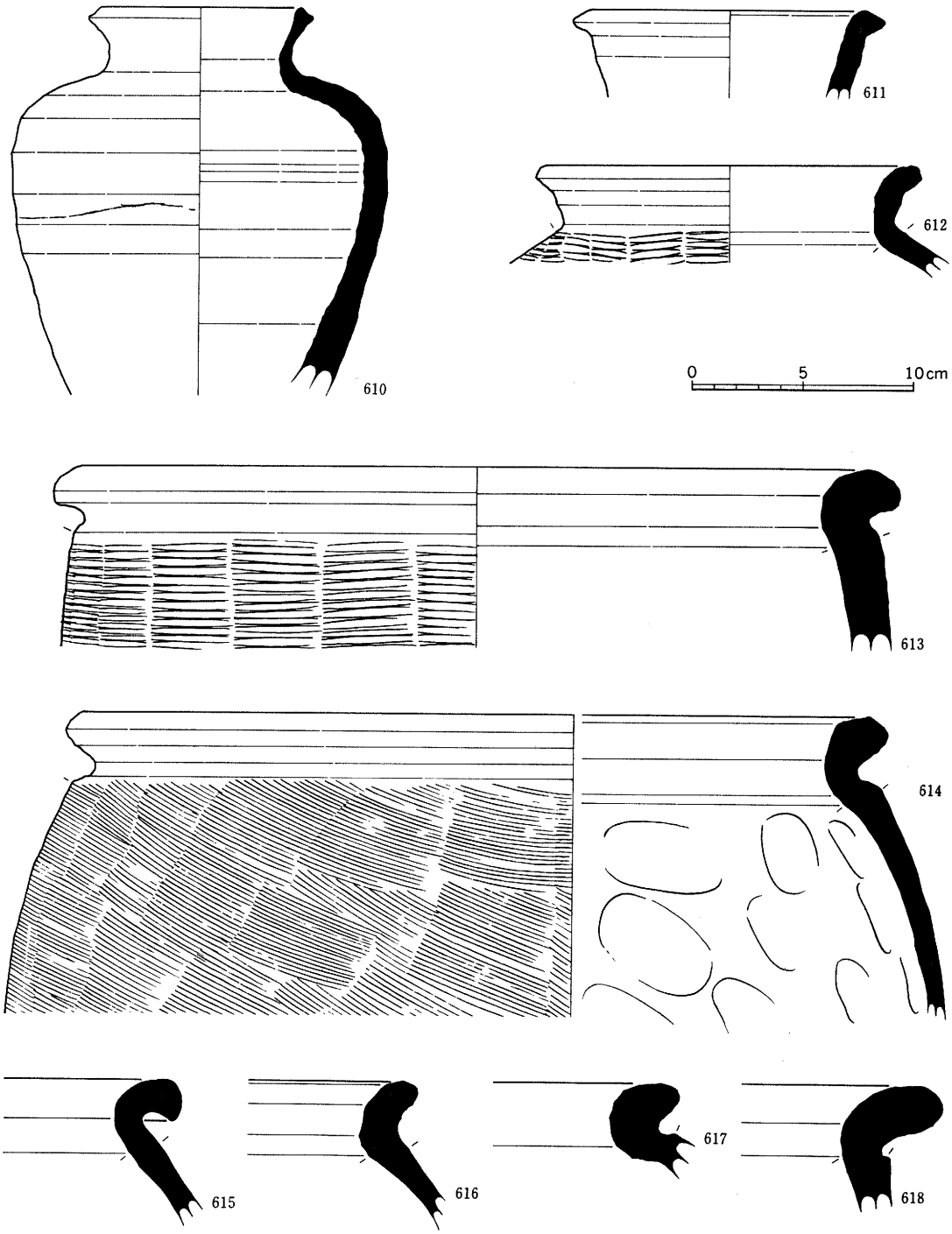
第21図　中世陶器実測図〔１〕（1/3）

SE02；601，表土；602・603



第22図　中世陶器実測図〔２〕(1/3)

SE01; 605, 表土; 604・606～609



第23図　中世陶器実測図〔３〕(1/3)

ＳＤ05；610，表土；611～618

Ⅵ 結　語

昭和60年度の試掘調査の結果より，十分に予想されたことではあったが，遺構・遺物は弥生時代と中世のものである。今回の調査地区は，少なくともこの両時期においては，その集落・村落の一部を構成していたことが明確となった。また，これらの時期以外については，付近の遺跡との関連を考えねばならず，今後十分に究明していきたい。

弥生時代

土坑，溝が検出された。当遺跡からは，以前の調査においても土坑は確認されている。その性格については，貯蔵穴，土坑墓説等が言われてきている。今回は既述の通り17基検出されたが，これらは主に形態より３つに区別され得るものである。すなわち，①長楕円形の土坑；ＳＫ10・17・19・20等，②円形の土坑＝楕円形でも円形に近いもの；ＳＫ06・07・09等，③大型の土坑；ＳＫ02・05である。全体の形態が判明しないものも，これらの内の①と②に所属すると考えている。またＳＫ14は①のバリエーションと考えたい。気づいた点を若干記すと，形態の違いが性格の違いを表わしていないかという点，及び①の長楕円形の土坑が南東部に集中している点である。溝では，ＳＤ01が注目される。この溝については方形周溝墓の可能性もある。この場合内辺で約19ｍを計ることになる。また，これ以外の性格を与える場合，集落内を区画する溝とも考えられる。出土土器のほとんどは櫛状具を多様するものである。調整手法は刷毛目が主体である。これらはいわゆる「小松式」とされているものであり，上記の遺構もこの段階のものである。なお，少量ではあるが東北系の弥生土器も出土している。

中世

井戸址，土坑，溝が検出された。井戸の各部名称・構造については，宇野隆夫氏の見解（宇野1982）に依拠して述べてきた。曲物積上げ井戸３基は接近しているので，同時に存在はしていなかったものと判断される。時期については，出土珠洲より，13世紀後半から14世紀ごろのものと考えられる。これについては，吉岡康暢氏の編年・暦年代観（吉岡1981）に依拠している。縦板組隅柱横桟どめ井戸も同時期のものであろう。土坑については，性格が不明である。溝は，大型のＳＤ03と小型のＳＤ04・05・06である。大型の溝の東側一帯に遺構が拡がっている点，小型の溝３条がいづれも曲物積上げ井戸の方向へ向いている点が，村落の構造を考える上で注目される。これらの遺構の付近からは，多数の中世ピットが検出された。建物址と認定する配列を確認し得なかったが，中世の建物の存在を窺わせるものである。珠洲については，12世紀代のものから15世紀代のものまで，新旧とりまぜて出土しており，中世の遺跡，村落がこの付近一帯に長期に亘って存在したことを暗示している。

参考文献

上坂成次・上野章　1968「高岡市石塚遺跡発掘調査概報」『オジャラ』3　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブO・B会

上野章　1972「弥生時代付古式土師器」『富山県史考古編』富山県

宇野隆夫　1982「井戸考」『史林』第65巻第5号　史学研究会

大野文郷　1986「石塚遺跡―富山県高岡市石塚所在の弥生遺跡調査概報―」高岡市教育委員会

久々忠義　1986「弥生時代の富山平野―米づくりの村と水田」『埋文とやま―富山県埋蔵文化財センター所報』第15号　富山県埋蔵文化財センター

橋本澄夫　1968「石川県小松市八日市地方遺跡の調査―県下の櫛目文系土器」石川県考古学研究会々誌第11号　石川県考古学研究会

橋本澄夫　1975「弥生土器―中部北陸」『考古学ジャーナル』No.106・107・109・111　ニューサイエンス社

逸見護　1982「昭和56年度高岡市埋蔵文化財調査報告書―石塚遺跡，荒見崎遺跡，利賀野遺跡」高岡市教育委員会

逸見護　1983「昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報」高岡市教育委員会

吉岡康暢　1977「加賀・珠洲」『世界陶磁全集3―日本中世』小学館

吉岡康暢　1981「珠洲」『日本やきもの集成4―北陸』平凡社

和田一郎　1959『高岡市史』上巻　青林書院新社

調査参加者名簿

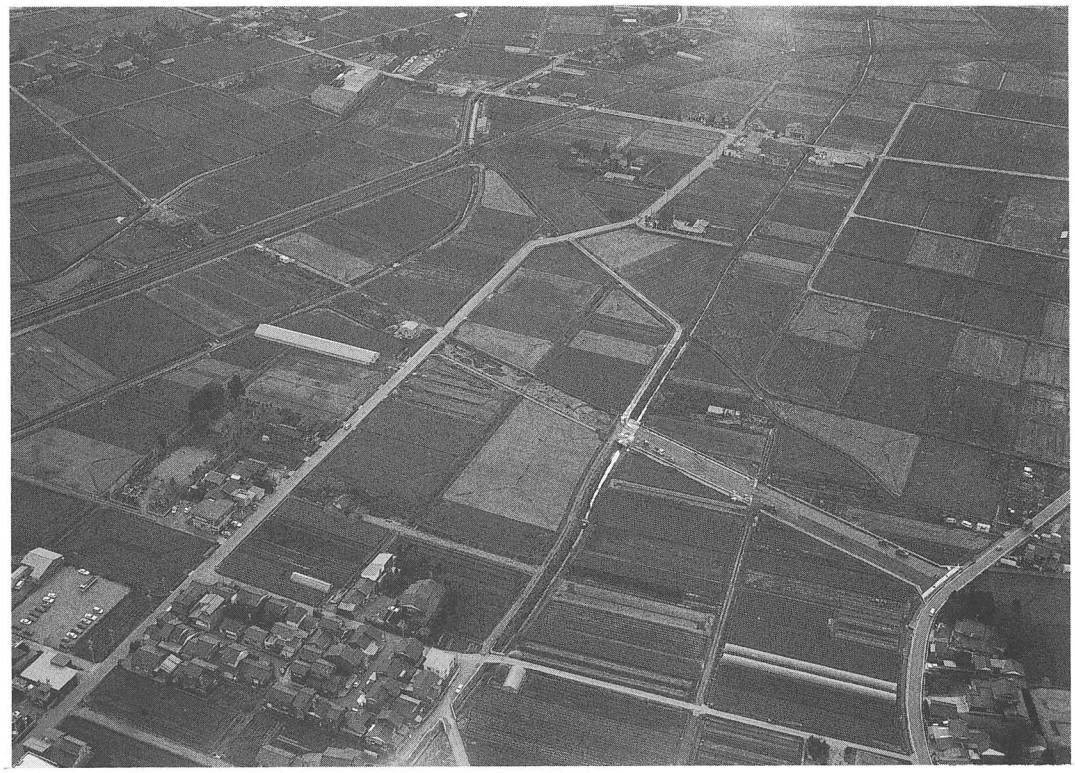
発　掘

青木真佐子，浅倉美紀，越砺為子，岡島敏雄，笠島庄蔵，川瀬木照子，国田豊蔵，後藤誠二，坂田興三次郎，島田英子，島田文子，守護晴津子，神保一成，杉林久松，田中新作，竹内清吉，武内元吉，津田安次郎，鍋田キミ，波能映子，平島富美子，船木悦子，間片淳子，宮下真知子，本沢民子，森田愛子，盛野弘，山口利枝子，山本他四，吉沢清信，吉野勝，吉久恵子

整　理

上田順子，小熊冷子，工幸子，坂下正美，守護晴津子，砂浦優美子，波能映子，船木悦子，宮下真知子，向しみ子

1．遺跡全景（東）



2．遺跡全景（北）

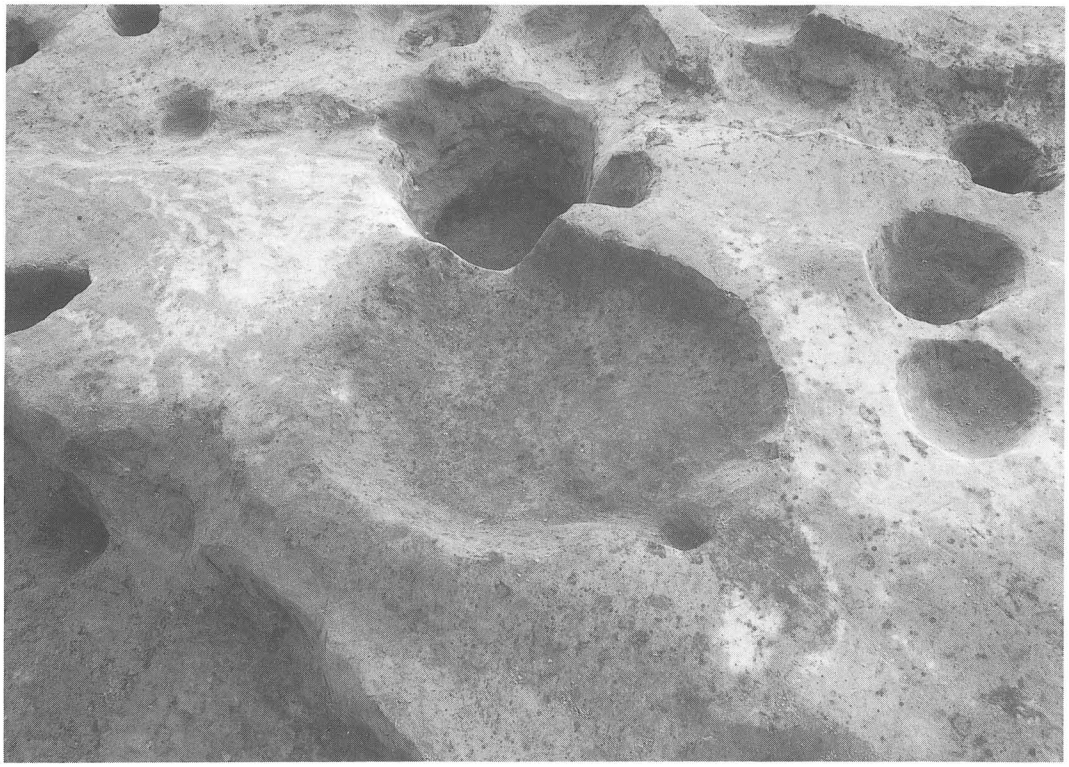
1．調査地区遠景（東）

2．調査地区遠景（南）

1．調査地区近景（東）

2．調査地区近景（西）

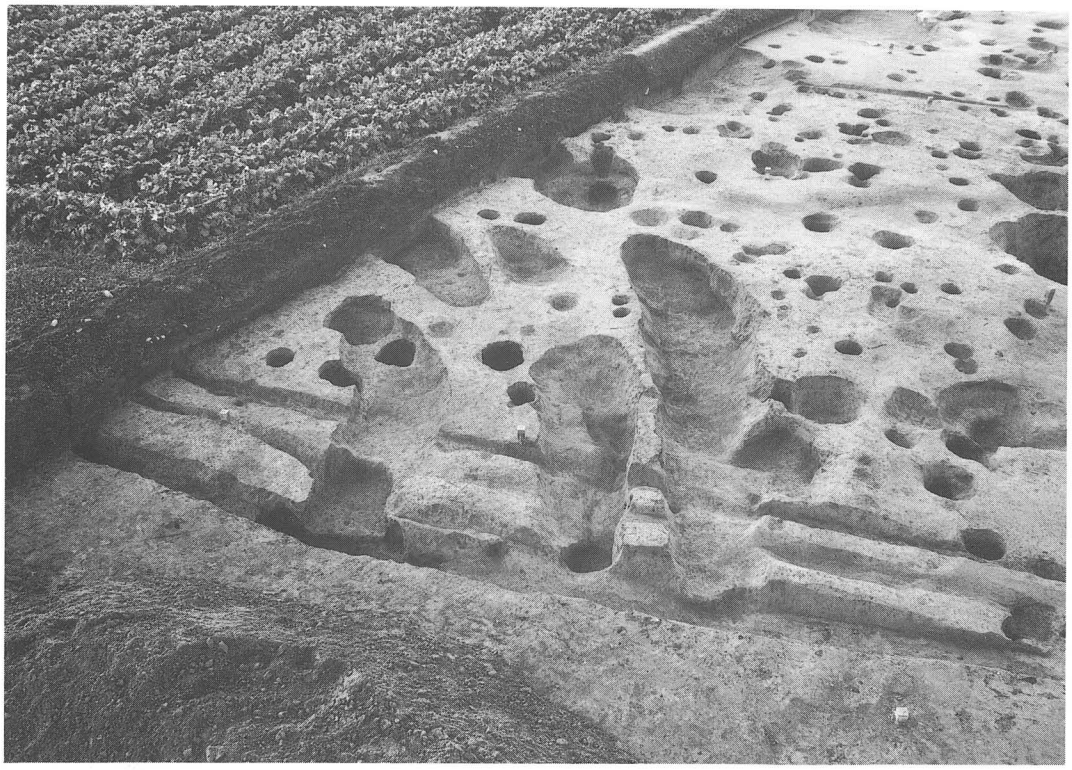
1．SK05全景（北）



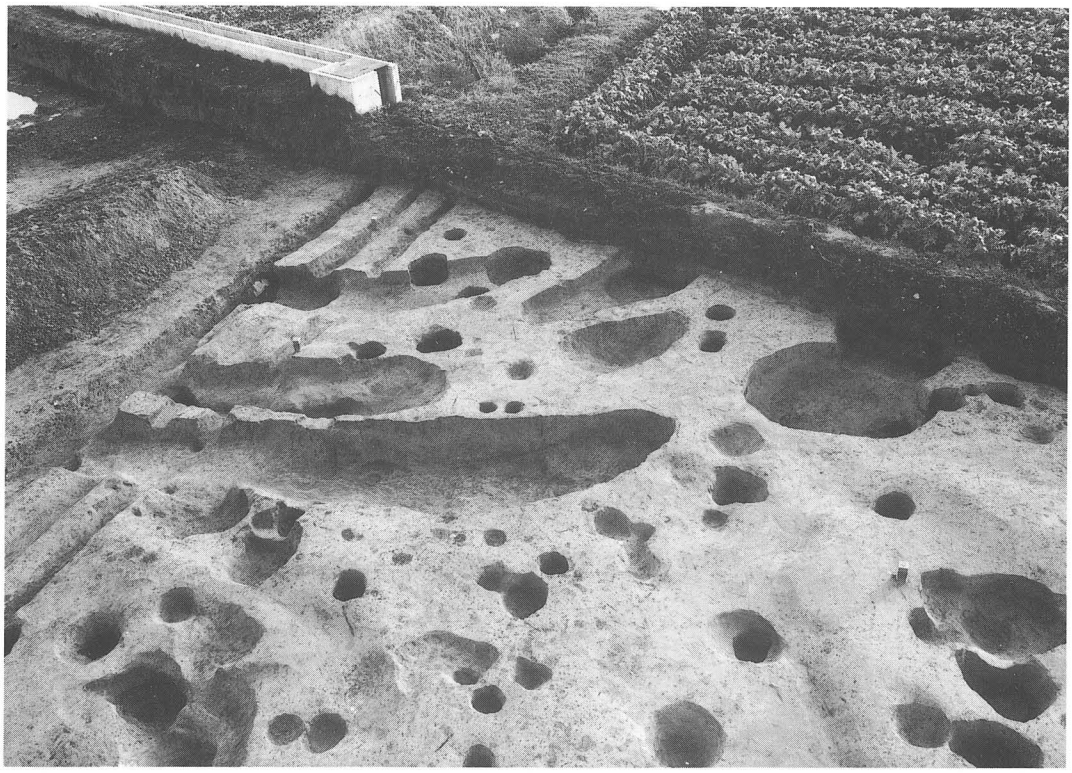
2．SK09全景（北）

1．SK10全景（北）

2．SK18～20全景（南）



1．SK13～20全景（東）



2．SK13～20全景（北）

1．SK20土器出土状態（南東）

2．SK20土器出土状態（南）

1．SD01北側近景（南）

2．SD01南側近景（南）

1．SD01自然樹木出土状態（北）

2．SD01自然樹木出土状態（東）

1．SE01～03全景（西）

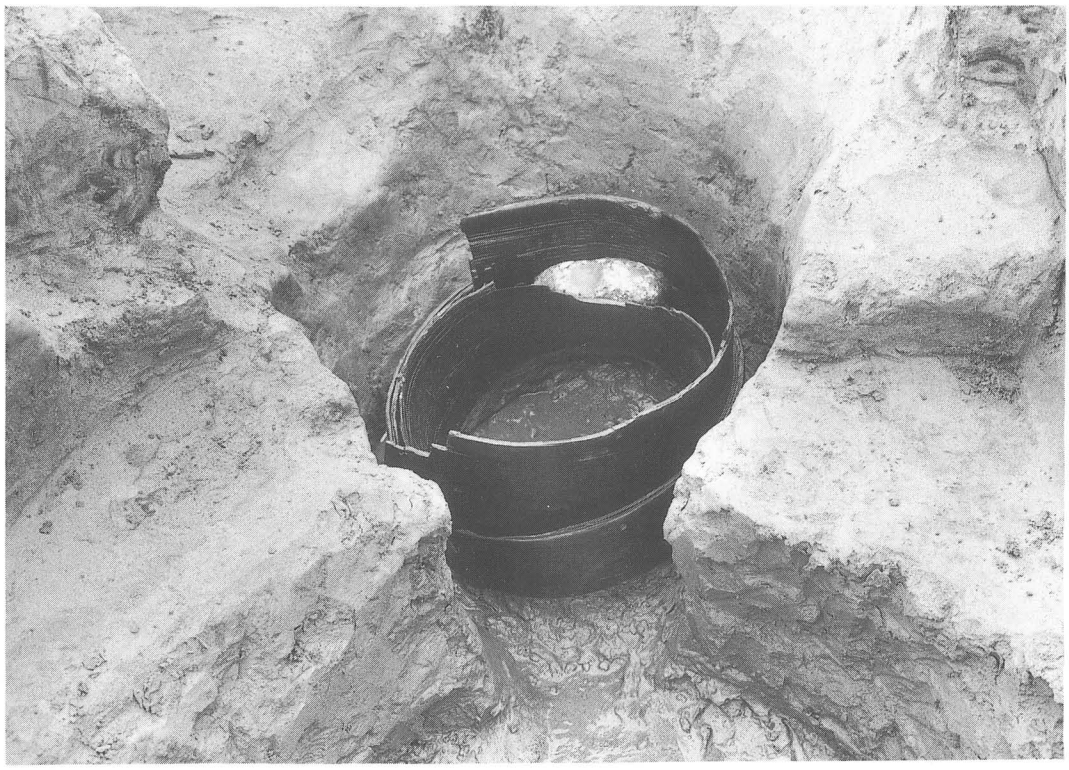
2．SE01～03全景（北）

1．SE01・02全景（南）

2．SE01・03全景（北西）

1．SE01全景（北）

2．SE01全景（北）



1．SE02全景（北）

2．SE02全景（南）

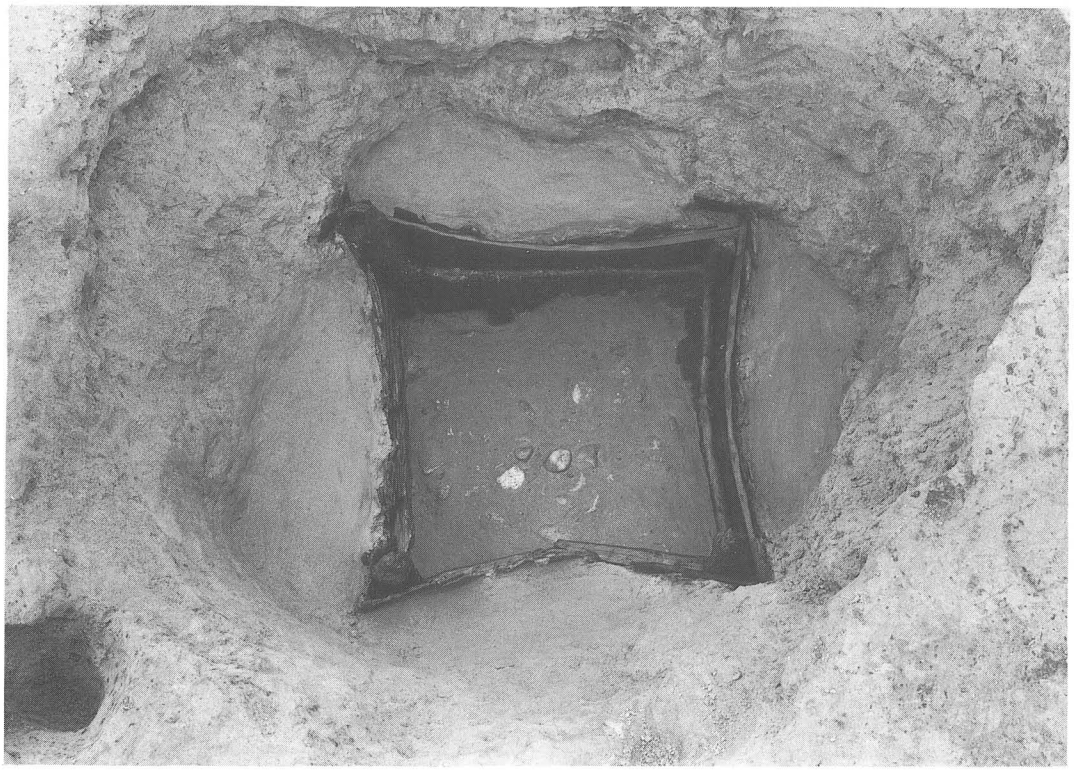
1．SE03全景（北）

2．SE03全景（西）

1．SE03全景（西）

2．ＳＥ03全景（北）

1．SE04全景（北）

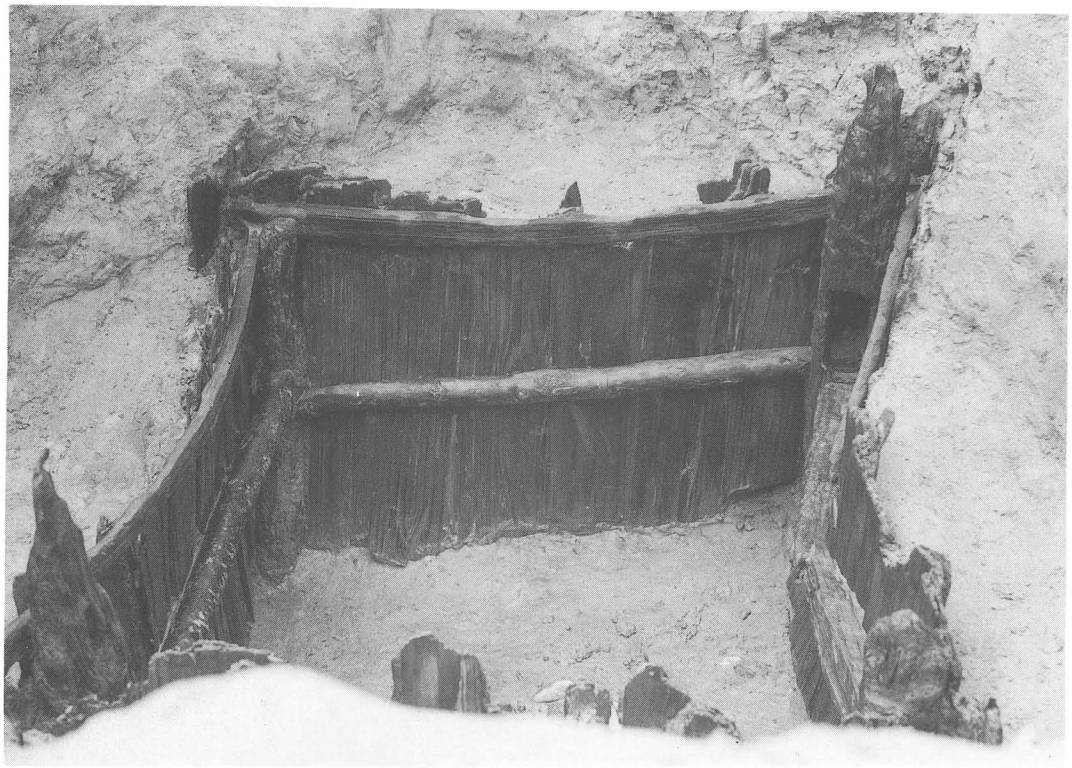


2．SE04全景（北）

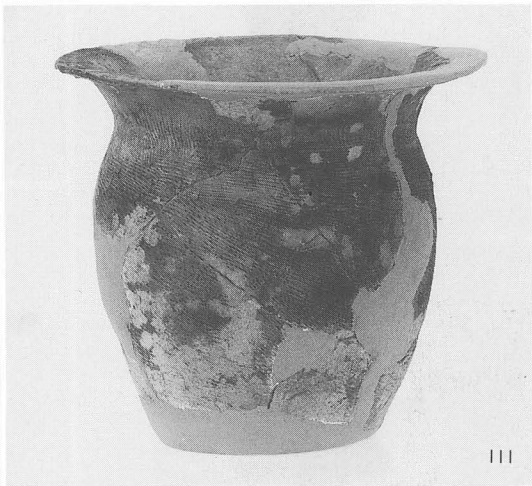
1．SE04近景（南）

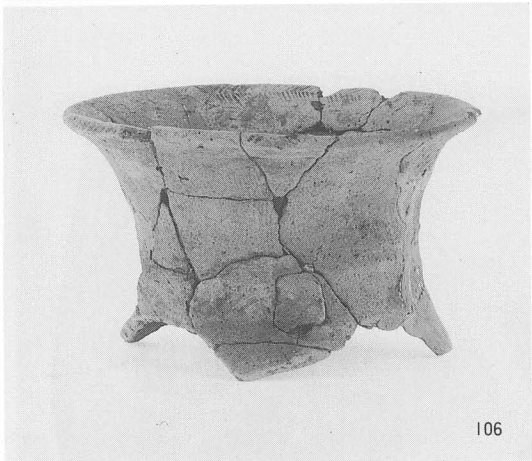
2．SE04近景（北）

1．SE04東壁（西）

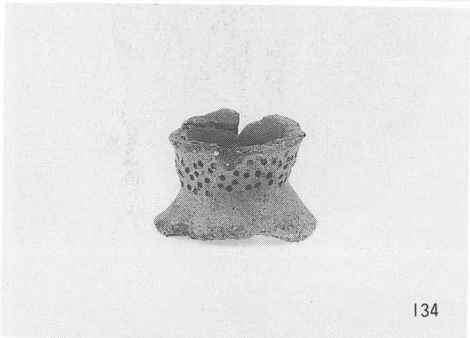


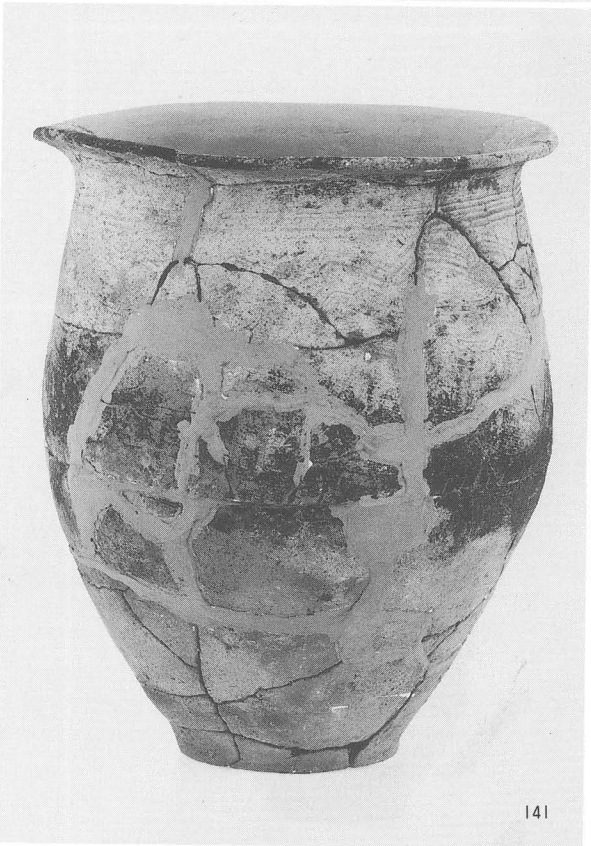
2．SE04西壁（東）

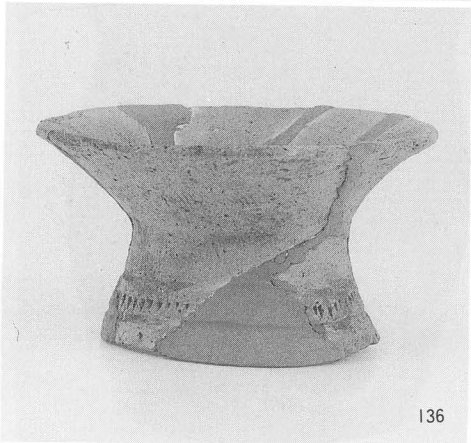




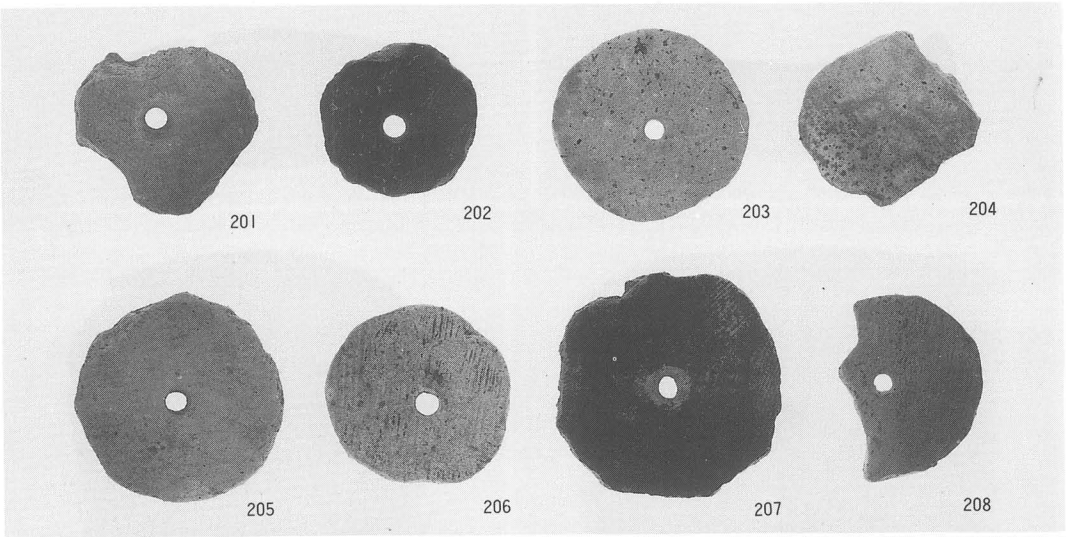
弥生土器

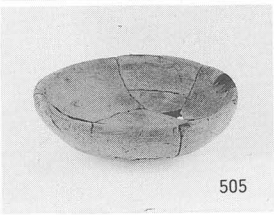


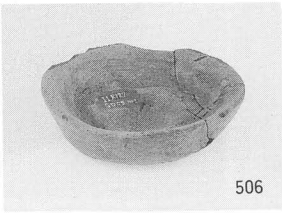


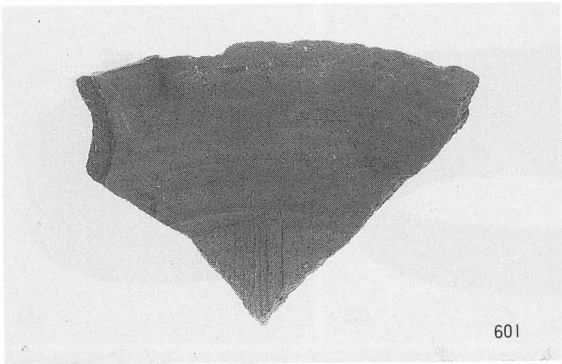


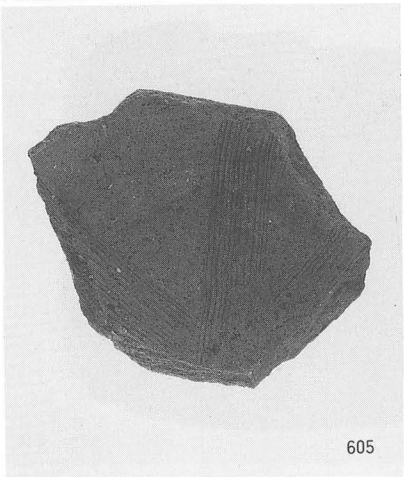
弥生土器

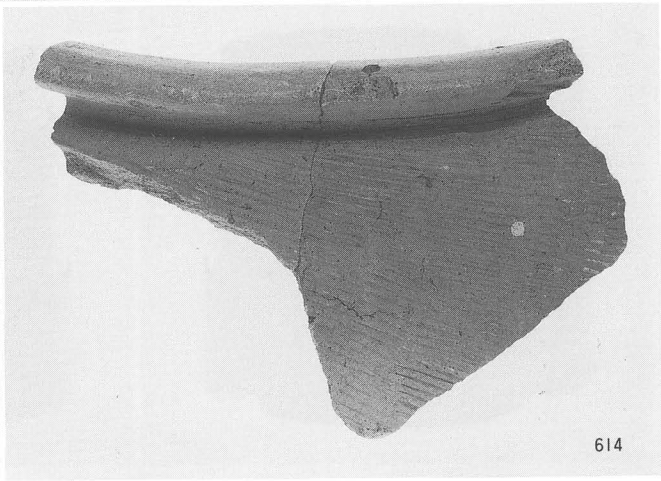




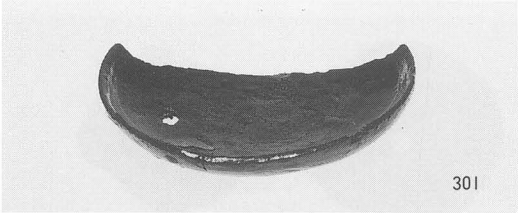


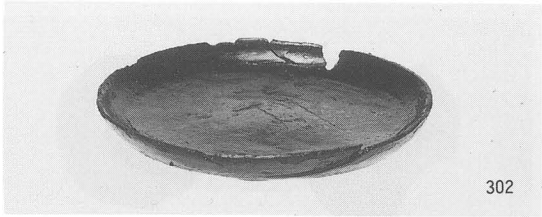


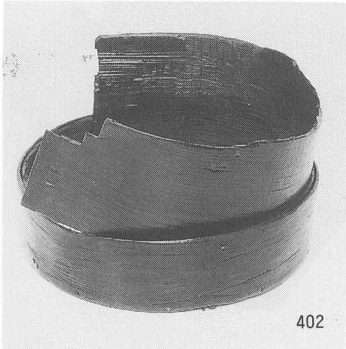


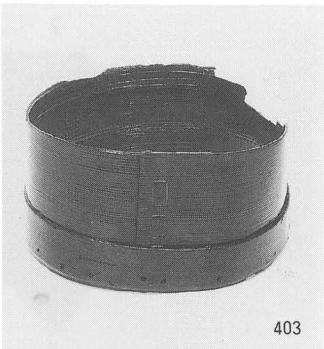


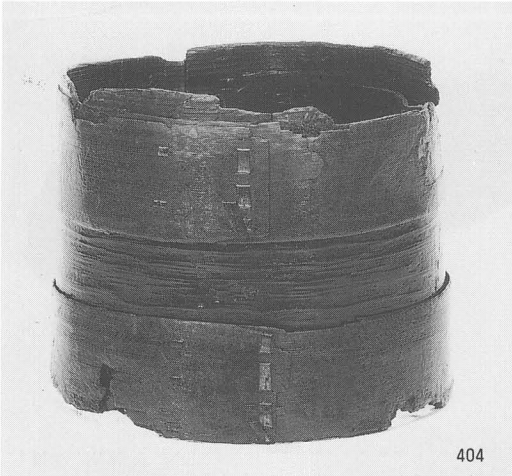
土製紡錘車，中世土器・陶器

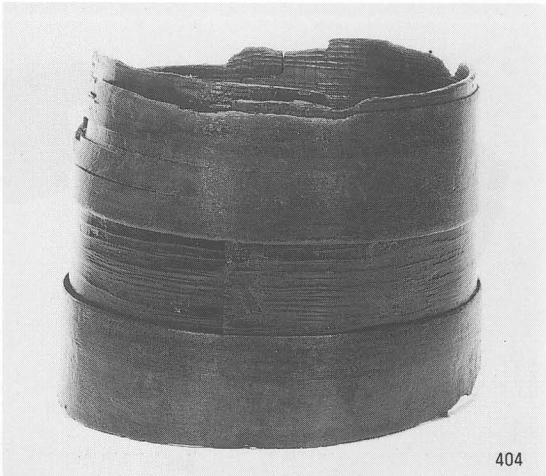












木製品

高岡市埋蔵文化財調査概報第３冊
石塚遺跡調査概報Ⅰ

1987年３月31日

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路７－50
印刷所　小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町３